江戸名所圖會

二

JL4
409
2

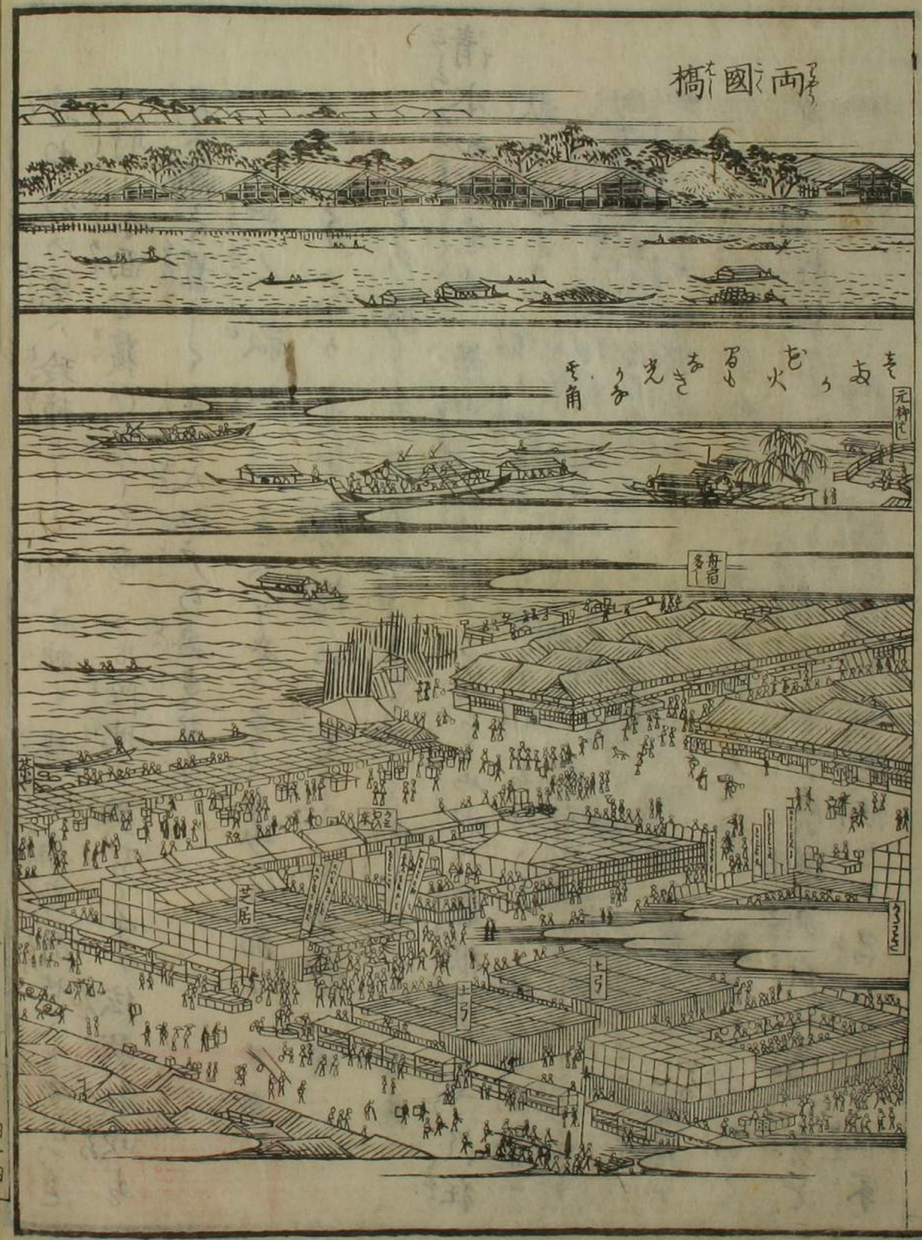
特
別
呂ル
門
號 409
卷 2

連ね燈の光ハ玲瓏として流ゝ映せ樓船扁舟所せく
一時ゝ水面を覆ひかゝやきてあるも陸地ゝ異なるす絃歌鼓吹も
耳ゝ滿ち〳〵實ゝ大江戸の盛吏なり

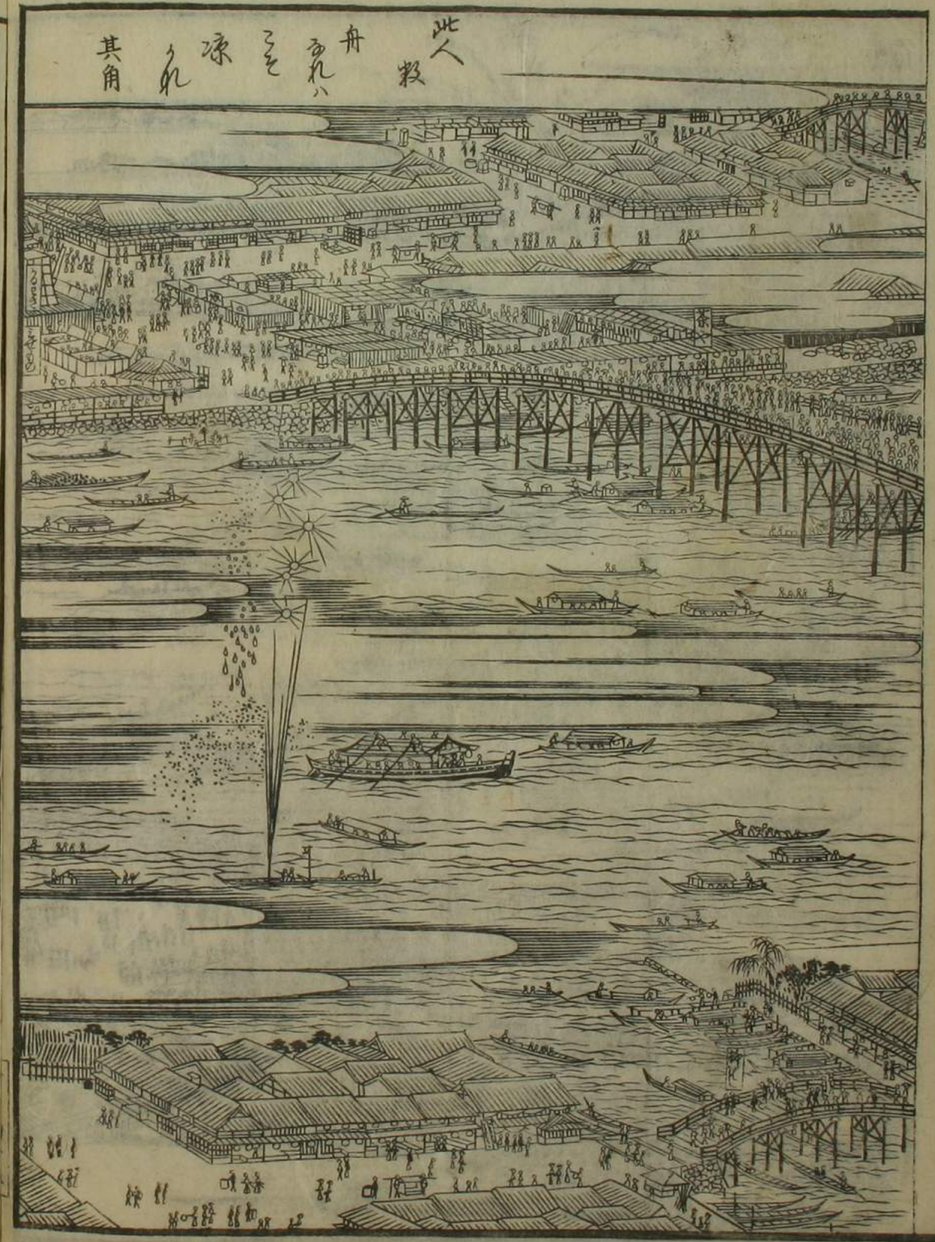
此人救ひ給ふまゝ
ゝ人ゝゝゝを探梅やそゝみそゝの卯 同

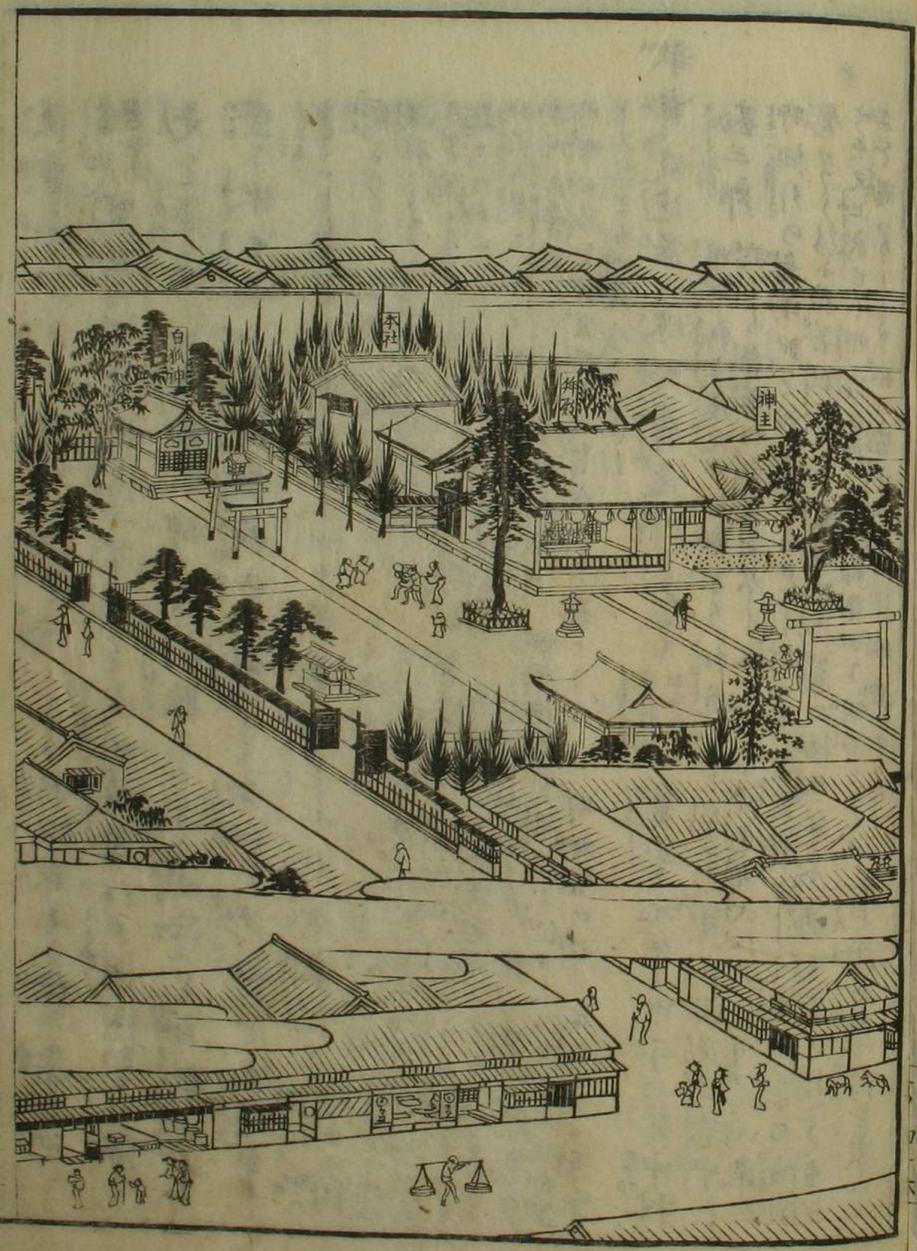
清水如水宅地 横山町ゝ住ゝるものゝ
歌ゝ名あり 常ゝ酒を飲ゝる時ハ
法師杖各狂奇ゝ名ありて家集もあれと此如水ハ名さへゝゝ人まれなり
如水一時大和國法隆寺ゝ蔵ゝるゝ和の賢聖の歌とゝゝる器物を
見ゝ後鄙ゝ彫物をゝるゝを得ゝりゝゝも鈍刀を用ひゝ
其巧尤絶妙なり依て需多ゝりゝれハ此匏瓜のゐふ身を
押へられゝりとの意ゆゝ自ら迷淵蟠鯨候とそ名のりゝる住家

芭蕉



より東は茅研堀と云而あり其辺知人の許へ行く樓上より
遠近を見やらく
又知らせハ茅ぶき茅なり茅研堀
又ある時漁父の辞の意をもてめる
世をもてあり我もとりのこ濁酒
享保十三年戊申正月三日朝起く
なすし雪哦北窓雷火す夜日飢饉炊なき國へゆく
かくてそ同し五日の暮方荊頭湯あり〳〵太神宮を拝しまふ終をとゝめとり
記をつくりてとゝめとり 按よ墓碑あり石を以て
相を表し〳〵没後文字を如此 鄭の形を造立す 今も浅草金竜寺
杉森稲荷社 新材木町あり 俗よ齢社ある所ふ誤
相馬の将門成を東國へ遣し〳〵せし〳〵 社記云此神像を
の計策を廻らし〳〵此神の加護ふ依く蓮に将門を亡し〳〵





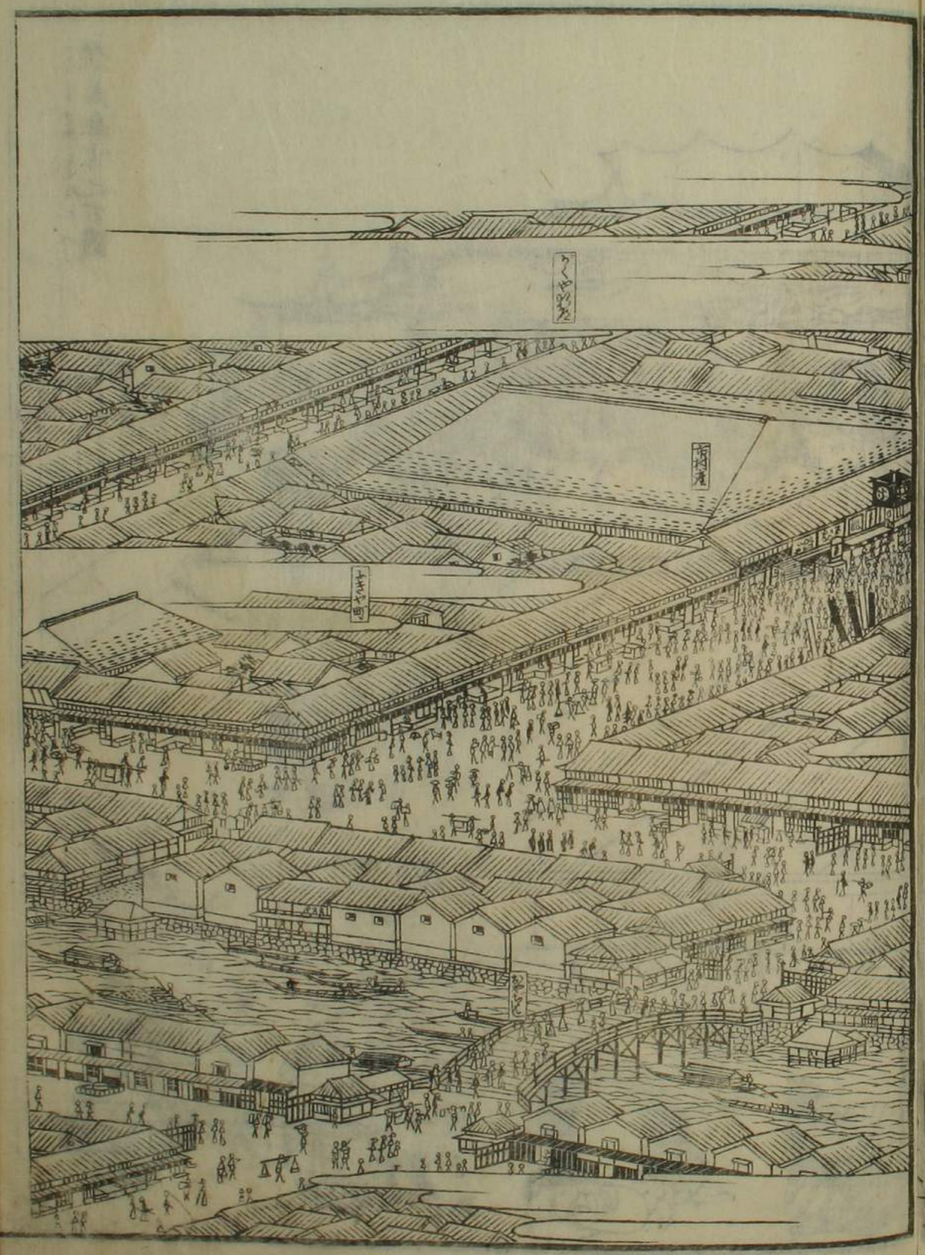
杉森稲荷神社

後霊夢を感し此地に至り稿くしる杉の森ある地を崇め祀る
當社寛正の頃東國大ひ旱魃を太田道灌江戸城よりひろく深く
是を患とし此御神ひ禱るに其驗ありくゝ雨降て百穀大に
登る依て頃山城國稲荷山を摸して伍社の御神を勧請
まつるとなり毎年四月十六日祭奠神主小針氏奉祀也當社始ハ
園ありく恭詣の道なりしかふ元禄十六年本多淨心少弼忠晴寺社の
観林なりし時社へ恭詣の道を開きたてゝ立つと深くりしかふ又此地の戌古老の
商戸の地ゆくく彼宅地よりあるしかふ稲荷
此辺大火災ニ依くく焦土となりしかふ新ニ頃此祠
吉川氏某深くく信仰しくく現然と残れハ諸人皆ゝ奇ひ
川町田名を称宜町と云昔當社の纏ひ姫子と姫大神とを相殿ニ祀ると云又或人云長谷
とされとも此説信しくく時祢宜の住し不ル知号ふる

歌舞妓芝居　堺町葺屋町ニあり

木挽町

寛永元年甲子の春中村
甚三郎堺町ニ狂言座元の始祖なり
時禁網及ひ営中に
猥ハしきを以て停止せらるゝ初道頓と号す
又ハ官賊安宅丸大江戸の川口へ入津の
時綱引の音頭謡を唄ひしを始とし
慶長の揚屋等今猶ほ家ニ伝ふる重宝
名を賜りしかふ
官府の免許を蒙り
江戸中橋ニ地を始て太鼓櫓を揚猿若狂言尽の芝居を興行
是大江戸常芝居の始元なり江戸鹿子ニ云なく記せしハ柴井町のことを
也まゐりくハ柴井町ニ芝居を後世ニ至て芝居を柴井ニ書改めくるゝ
ありく中橋へ引移し堺町へ引移しくるゝを又江戸名所
日本橋の西河岸町ニ芝居を取建るとあり事跡合考ニ寛永元年
中橋の芝居ハ柴井ニ芝居町
初行のそろ
貴賤群集
同九年壬申中橋より
辛卯今の地ニ移る
祢宜町
寛永二十年印本吾嬬
又角力を外薩摩太夫虎屋ニ操土佐
麹を挙又寛永十一年甲戌村山又三郎
弟子村山又左衛門の子村山
又ハとゝる者の次男ありとの
芝居を興行し能の狂言を
しむ市村羽左衛門座是なり
堺町狂言座元の
昔屋町
勘三郎の弟ニ
道具建を製出せる
三年庚子森田太郎兵衛
江戸中橋より地の下ニ始て太鼓櫓を揚猿若狂言尽の芝居を興行
是大江戸常芝居の始元なり江戸鹿子ニ云なく記せしハ柴井町のことを
也まゐりくハ柴井町ニ芝居を後世ニ至て芝居を柴井ニ書改めくるゝ
ありく中橋へ引移し堺町へ引移しくるゝを又江戸名所
日本橋の西河岸町ニ芝居を取建るとあり事跡合考ニ寛永元年
中橋の芝居ハ柴井ニ芝居町
初行のそろ
貴賤群集
同九年壬申中橋より
辛卯今の地ニ移る
祢宜町
寛永二十年印本吾嬬
又角力を外薩摩太夫虎屋ニ操土佐
麹を挙又寛永十一年甲戌村山又三郎
弟子村山又左衛門の子村山
又ハとゝる者の次男ありとの
芝居を興行し能の狂言を
しむ市村羽左衛門座是なり
堺町狂言座元の
昔屋町
勘三郎の弟ニ
道具建を製出せる
三年庚子森田太郎兵衛
谷川町
今俗ニ
長谷川町
と字ハ
誤ニ
祢宜町より左迄とゝる
住ふ
唱へくり
猿若芝居
此又三郎
名護屋山三郎の
役者をまねて舞子六人ゐ勤
二代目を
竹之丞
堺町狂言座元
二代目明石
引幕
其後萬治
元年甲寅ニ
官府の免許ニより


さかいまち
ふきやまち
蔵場
あやつり座
中村座
市川座
さかい町
ふき屋町

猿若狂言之古圖

木挽町五丁目汐入の地へ芝居を取建坂東又九郎といふ者の
二男又七といふを養子とし名を森田勘弥と改む（木挽町狂言座元これより始）
同巷木挽町其餘堺町葺屋町の間よ操座木偶芝居ありて四時よの下よ詳へ
賑ひへり元禄能技の江戸鹿子よ堺町葺屋町の二丁ハ古へより操見せ物又ハ狂言尽くあるひハ放下の品玉縄切の曲を業とする者とも寄あつまり終日
観来をの地ありと又江戸名所ハ江戸大薩摩土佐の太夫和泉太夫江戸半太夫説経鶴屋源太郎う南京あやつりあやつり
浄瑠理天満八太夫
ことをもるせり

吉原町舊地　和泉町高砂町住吉町難波町等其舊地なり（住吉町難波町）
等の河岸を竈河岸と字ハ則普請の曲輪の外堀ありと云（竈屋多きゆえの）
俗称なり此不
とつくる者街を一所よ定めかりけり慶長十七年庄司甚右衛門
初て此地を賜り花街とす往時慶長の頃迄ハ江戸よ点
たる傾城町もあく二軒三軒つゝかこふ散在せしを其中軒を
並へくりしハ麹町八丁目あく十四五軒ありく何ぞも京六条より
迁る又鰻倉河岸ゟ十四五軒大橋柳町ゟ廿軒ありしと云

此大橋と云ハ今の
柳町と云ハ道三河岸の辺をの
見吉町奈良木辻等よりも追く大江戸よ移ゟぬ慶長十一年の頃
柳町の地ハ召上らる元誓願寺前へ引移くりしく傾城屋とも打寄
相談の上場所取立度由願ゟれとも御免なくゝ庄司甚右衛門
初て同十七年の頃願ひ元和三年の頃公仰付元和三年霜月地
形普請出来て高賣せり江戸町一丁目ハ浄一統の後初て開基せし
少ゝかく号け同二丁目ハ鰻倉河岸より引京町一丁目ハ麹町より
引同二丁目ハ追くゝ来上方の傾城屋を置ゟ一両年やて
普請悉く成就せしゟハ新町と名付くり角町ハ京橋角町より
うつゟ寛永三年よ至り五町全く家居落成しく此に移ゟて
然よ明暦二年浅草の浅今の地へ迁さるゝをやうやくさゝと
いふとも明年引移り度由の所翌年五月十八日の大火よ焼亡す
依て同年六月悉く元吉原の地を引拂同年八月今の地へ移る

菊屋

大門通

昔此地ハ吉原町
あり一項の大
門の通り多り
しゆゑにかく
名つく今ハ銅
物屋馬具師
多く住り

清
ひさし
九尺四方
の
表
平角

普請の間今戸烏越山谷の間に借宅して渡世をするを
ゆるされ花街今よ賑地に在るハ戯場相接して滋繁昌をハ極むへ
くもと祝融の祟弥志くのふへしてふ彼地へ移されしを
おほやけの御恵いと有難きことなりふしぬ

○按ふに奇舞妓ハ其始遊女より出て
異語なり昔ハ高貴の人を愛せて
称と呼なしゝるよりのしゝ遊女
とのみ故よ今狂言座元を大夫元と
呼ふも余風のなほ残れるなり寛永十八年の印本そこに
長門守杉山主殿米島形後守
町南をあけくれ中ゆも佐渡島
居美しく軒をならべ草の仮家をあまたなら
墨を置ひしふ與祝ひ置ひしふ與祝
是を禁せしもしかハ若衆奇舞妓の舞
少年の奇観なり
舞ハ
濱町よりを宝暦十四年此地へ移されし
家集なり

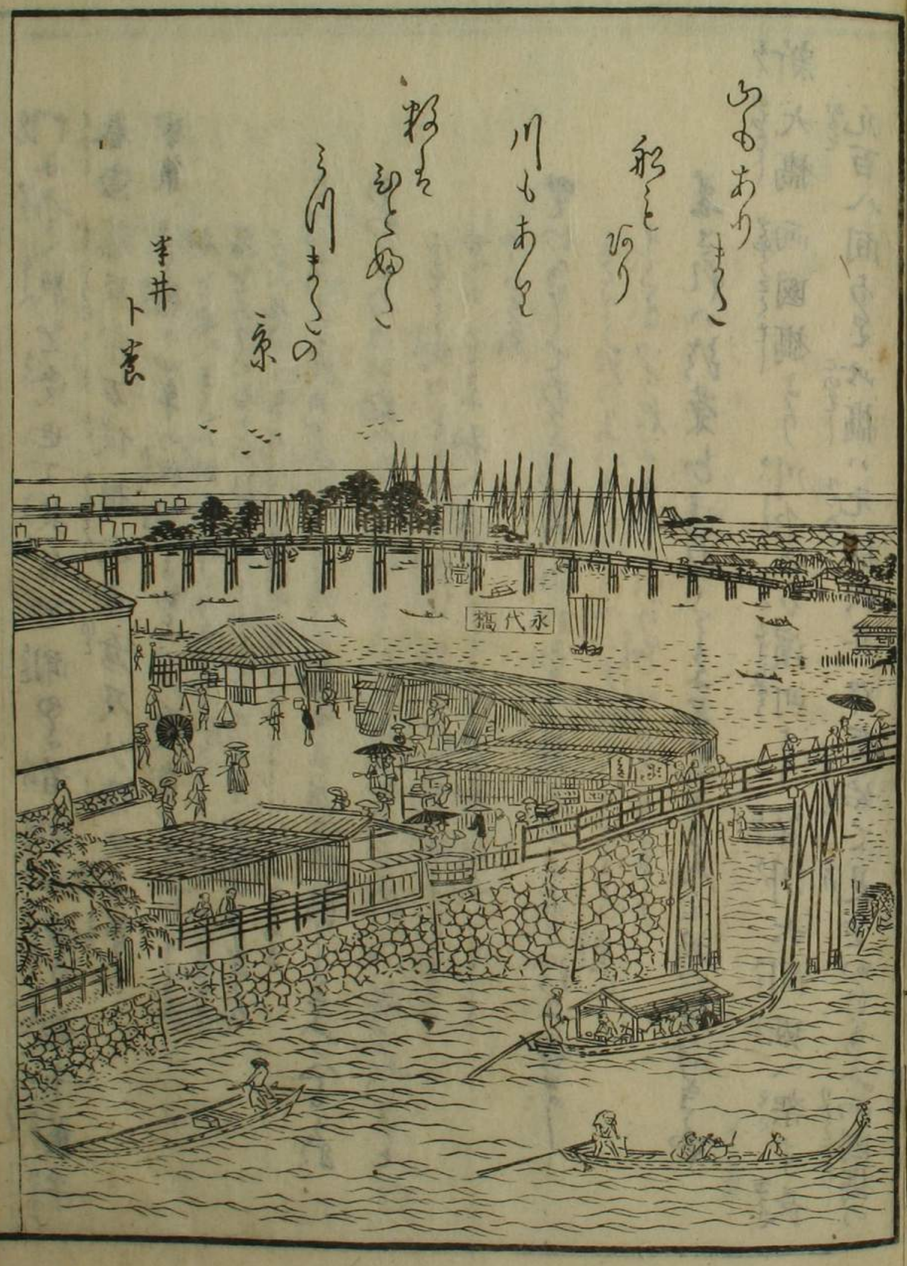
○真淵翁所居地

賀茂の

岡部衛士又ハ縣居とも称せり賀茂縣主成助の未葉にして世〻洛北
賀茂大神の宮司より同師朝の時文永十一年甲戌遠州濱松庄
岡部郷なる賀茂の新宮を奇まつるき詔を蒙りて又彼地を賜りて
其宮の神主となりて即岡部郷よ住せり翁ハ其後裔定臣とかいふ
子ふく元禄十一年丁丑彼地よ生る壮より深く國朝の学に心ざし
よせ享保十八年癸丑花洛よ至りて荷田宿祢春満の教を受け後
大よ國学を以て世よ鳴荷田宿祢ハ本姓なり世よ羽倉翁と称す此人ハ洛南稲荷社の祠官なり寛延三年
庚午大江戸よ来りて田安の殿の召ふ應して古への書の道の博士として
特よ愛させ給ひて頃衣を賜りしハ其かゝやかしきものと弥や栄りふん

あゝひてふあの死衣を氏人のかつむるものと
其後宝暦十年庚辰仕をかへて濱町よ隠栖して翁を縣居
と唱へ庭を田居の様よ作りて賀茂氏の姓よも縁あるへ
くそこゝろ家の号よ呼れしとそ生涯の著述凡六十餘部其

新大橋
三ツ俣



ふるあり
まつ
秋とゆう
川もあり
秋をおもふ
三ツまたの
家

半井
卜養

門に入る教を受世に其名を聞ゆる者本居宣長橘千蔭平
春海藤原宇万伎楫取魚彦及び倭文女等之
家集 寛政十四年の秋濱庭を出へきころハ畑よはくさ
名をあるころのひそ
とそきくつゝ
こゝろもとなきやあるらん
あかつきのちゝの露の
こゝろ氏のこゝろの
かりこゝろ
やもめ
聖にきこえあるら
きこゑのまつくいく女の
きまつくれるうすき
書されハ詞葉も咲あ
あるこゝろ君ゆきんと思ひうけきや

新大橋 両國橋より川下の方濱町より深川六間堀へ架す長
凡百八間あり此橋ハ元禄六年癸酉始て是をかけ両國橋の
旧名を大橋と云故に名よりて新大橋と号らるゝとなり
風羅袖日記 元禄五申年の冬深川大橋

初雪やかけそめ
ふしく橋の
ありかくやいくへ
ひくとも

芭蕉

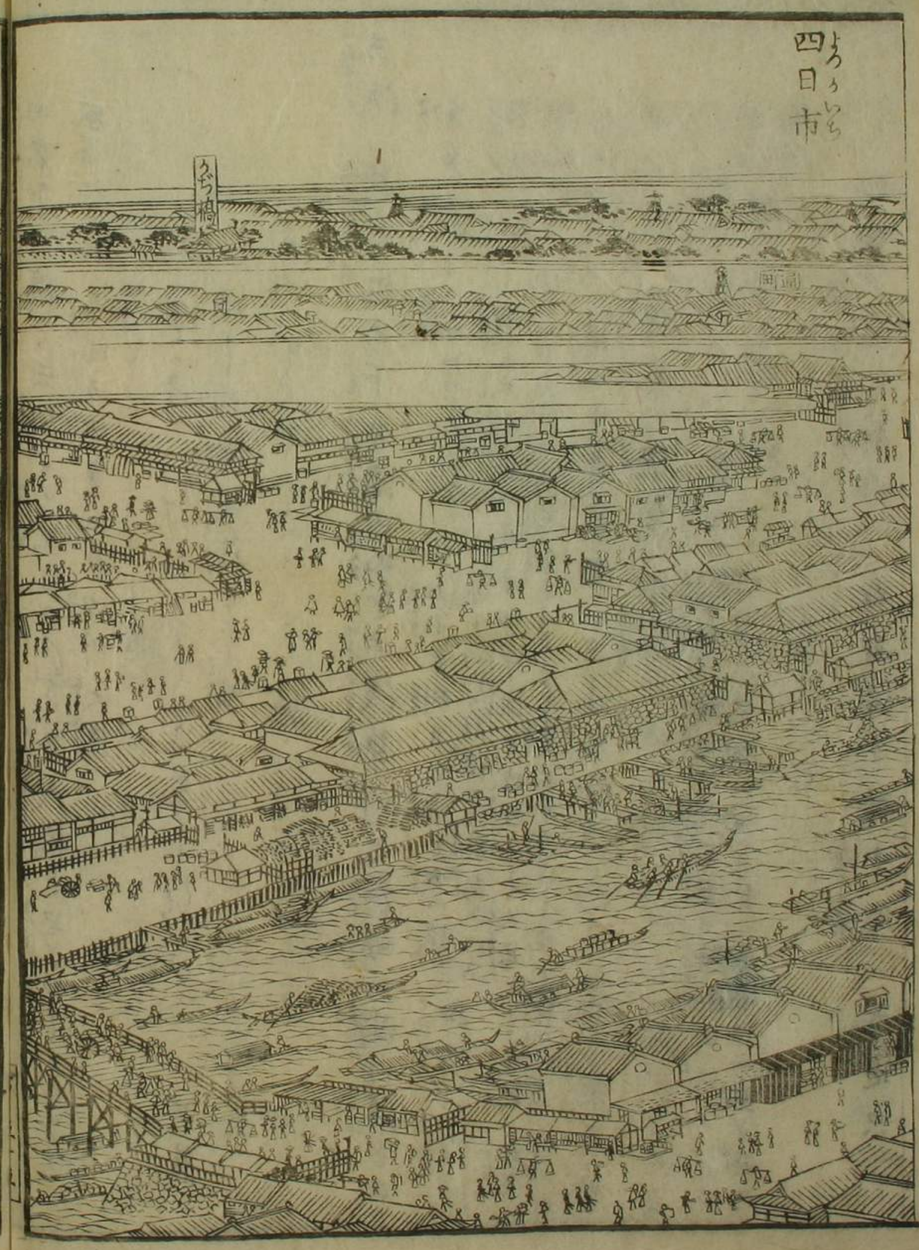
三派 新大橋の下分流の
分を流るゝ
名所なり
因に云明和八年辛卯中流を埋
堀立昔ハ多く遊女哥舞妓の類ひこゝ
更闌の夕ハ清光の限なるを
甚賑しかりしとなり
くゝ
笛吹ながらし

此所ハ月
水との
中洲と称せり
寛政元酉年より復元のくの川ふ
船をうかべ宴を催し殊
に詠ひ酒よ堂しして奇諷ひなんと
江戸雀よ諸國の大船珠よ唐船此川まかる
限なき納涼の地なれハ船遊ひの船よ波の

三又江絶舟
風静又江不起波

輕舟汎々醉中過一天遊只

春臺


四日市

江戸橋　日本橋の東にありて伊勢
南の橋詰巽の角に船宿あり江戸の内諸方への船場あり又
同所西の方木更津河岸と字を房州木更津渡海往還の
船こゝに集るゆゑ名とす

四日市　江戸橋と日本橋の間川より南の方の大路を云昔ハ四日市
場とのゝしり村あくのふゝへハ今の繁華のめぐるなれハ萬の賈
街も市をなしく交易せられハ得こゝに放なれにや日市を
立る區を名つけて某日市と云羽州のおくりおハ二日市と云より
十日市と云近區の名小ばき交易せり此地も昔ハ毎月四の日ゆ

中橋

市を立しかなりとそ尓ふ今も其遺風ありて草物又ハ野菜の類ひ其余乾魚なとの市あり
祭禮の地なり此地に根津權現の御旅所あり
あり下より石を以て疊揚上ゟ家根を覆ふ　明暦閒板のむさしあぶみに正德年中ゟ造
橋の南萬町より四日市近の町屋を取除け高さ四間ゟ川端通る草紙ゟ日本北ゟ東西二町半ゟ土ゟ蔵を疊あけらると云ふ今默岸島ゟ四日市と云ふ町家あるを此所
より

祇園會旅所　南傳馬町一丁目と二丁目の閒の辻ゟあり　水社ハ神田明神の地ゟあるも祭所素盞嗚尊ゆゑて是を大政所と称せり
毎年六月七日ゟ神幸ありて同十四日歸輿ありて其閒恭詣多く甚ゟきへなり

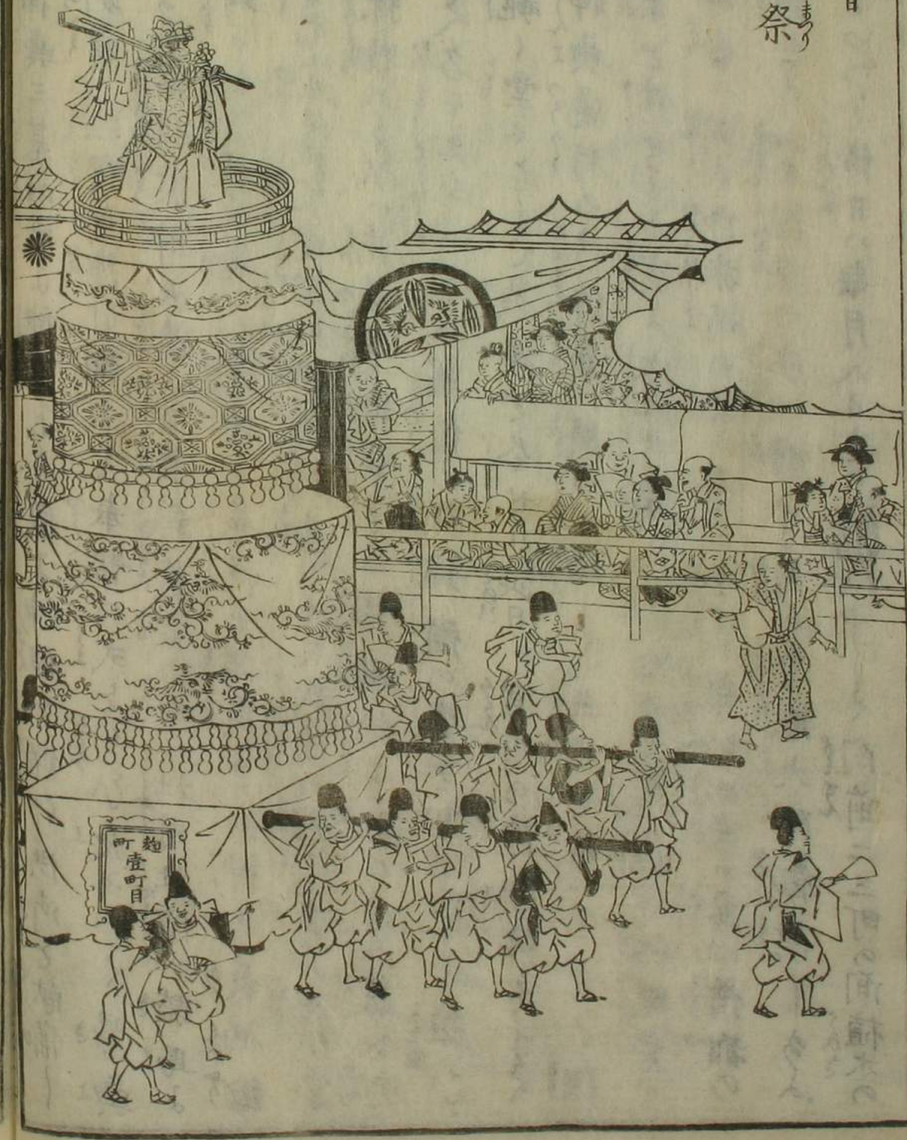
鎧の渡　茅場町牧野家の後を云此所より小網町への舟渡を云ふ里諺ゟ云永祿年閒源義家朝臣奥州征伐の時此所より下總國ゟ渡らんとそ時ゟ

鎧之渡

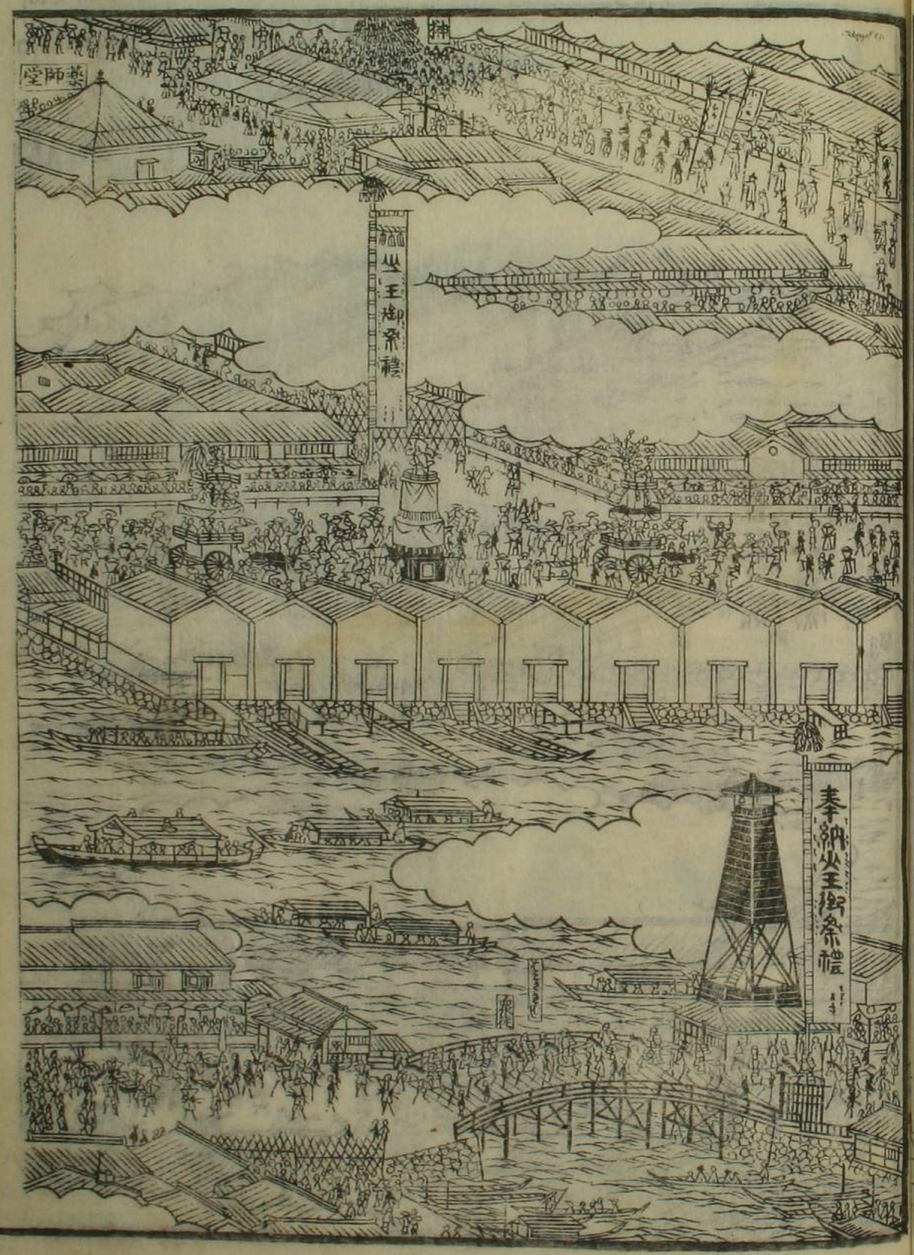
暴風吹發て逆浪天を漫し既ゐ其船覆らんとせ義家朝臣
鎧一領をとりて海中へ投し龍神よ手向く風波の難なら
らしめむ事を祈請を遂ふはくうなく下總國ゐ着岸あるそ
より此所を鎧ヶ淵と呼へりとなん
牧野侯の庭中ゟ
ありと記せり

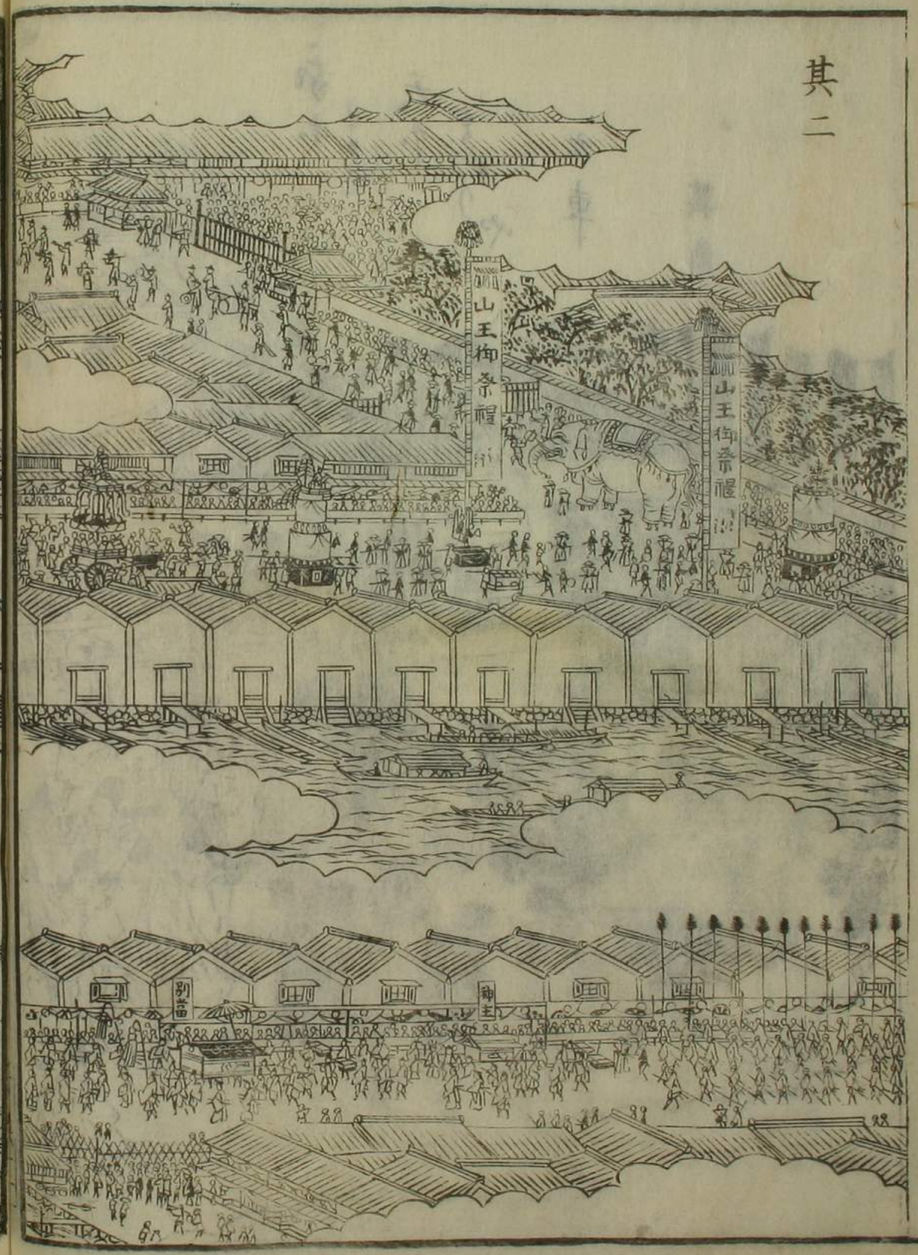
塚　同所海賊搦の東詰牧野家の庭中ゟ源義家朝臣
奥州征伐凱陣のゝ先の報賽のゝめ且ハ東夷鎮護のゝと
して日本武尊の古き例ゟ準ひ自の兜を一堆の塚に築き
篭のひしとなり今其傍ゟ義家朝臣の靈を鎮祠小祠
あり（榮の一本ゝゝる双帋ゟ甲山とあり）
（榮の一本ゝゝる顔を曽と共ゟ持添）
永田馬場山王御旅所　茅場町ゟあり遥拜の社二宇並ひ建を
寛永年間此地を山王の御旅所ゟ定らゝとのゝへ
（一宇ハ神主樹下氏持）
（宇ハ則當觀理院持）隔年六月十五日御祭礼ゆく永田馬場の御本社ゟ
神輿三基此所ゟ神幸あり假ゟ神殿を儲け供饌を献備へ
別當ハ法樂を捧け神主ゟ奉幣の式を行ひ夜ゟ入ゝ帰輿
なり其行裝榊大幣菅蓋錦蓋雲のゝく社司社僧ハ騎馬ゟ
跨ゝ或ハ輿ゟ乘へ前後ゟ危後を諸侯ゟりハ神馬長柄鎗
を出されて途中の供奉嚴重なり又氏子の町ゝゟりハ思ひゝゝ
練物あるひハ花屋臺車樂等ゟ錦繍紗子抔のまん幕を打
各ゝ生立花やうゟ羅綾の袂錦繍の裙を引ゝゝ粧ひ
巍ゝ堂ゝとしゝて善美を尽せり　此日　官府の御沙汰としゝく
神輿通行の御道筋ハ横の小路ゝゝハ矢来を結ゝゝ往
来を禁せらるる実ゟ大江戸第一の大祀ゆゝゝ一時の壮観ゝり
藥師堂　同く御旅所の地ゟあらも本ゐる藥師ゟ来ハ恵心僧都の
作なり　山王權現の本地佛ゝゝゝと縁日ハ毎月八日十一日　正五九月昔ゆゝゝく　門前二三町の間植木の

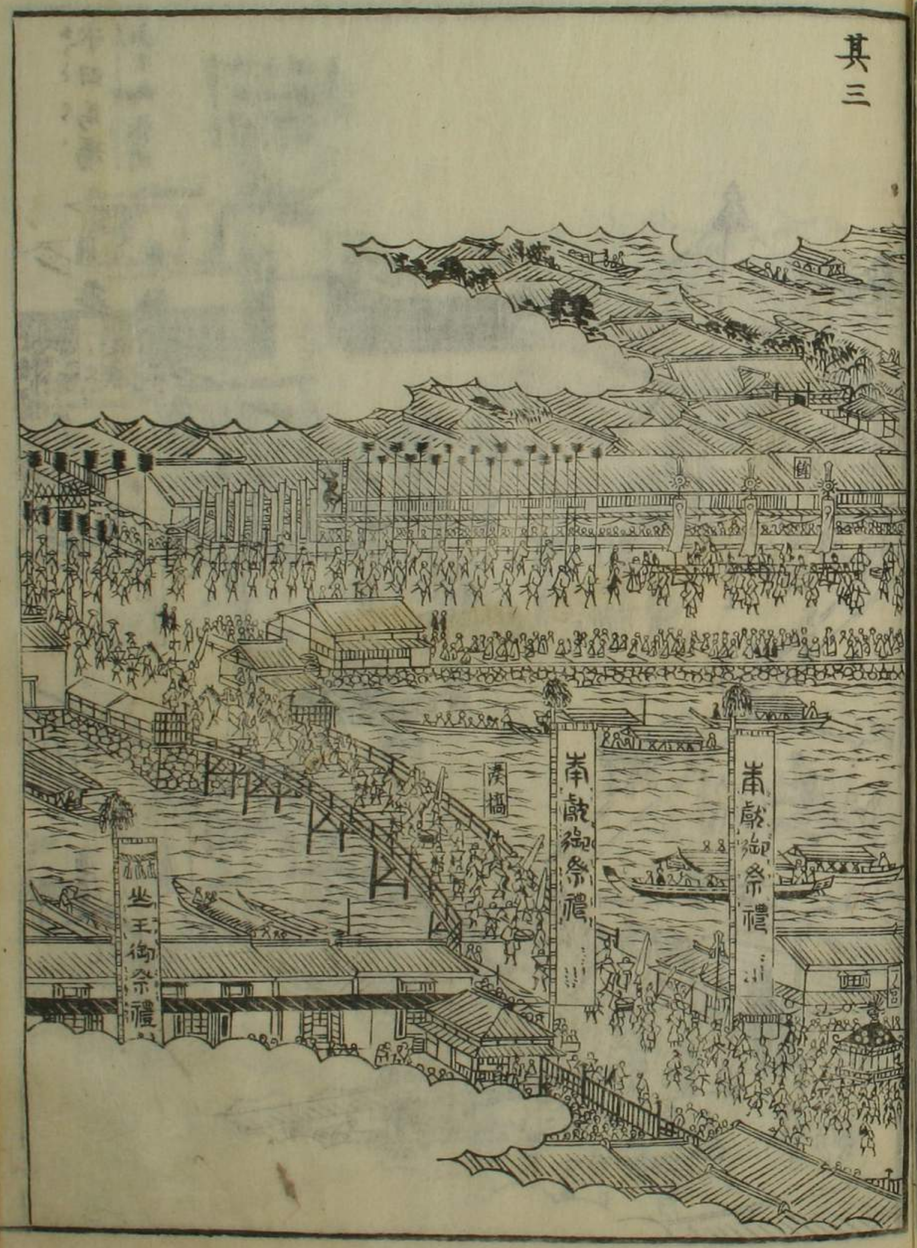
六月十五日
山王祭（さんのうまつり）

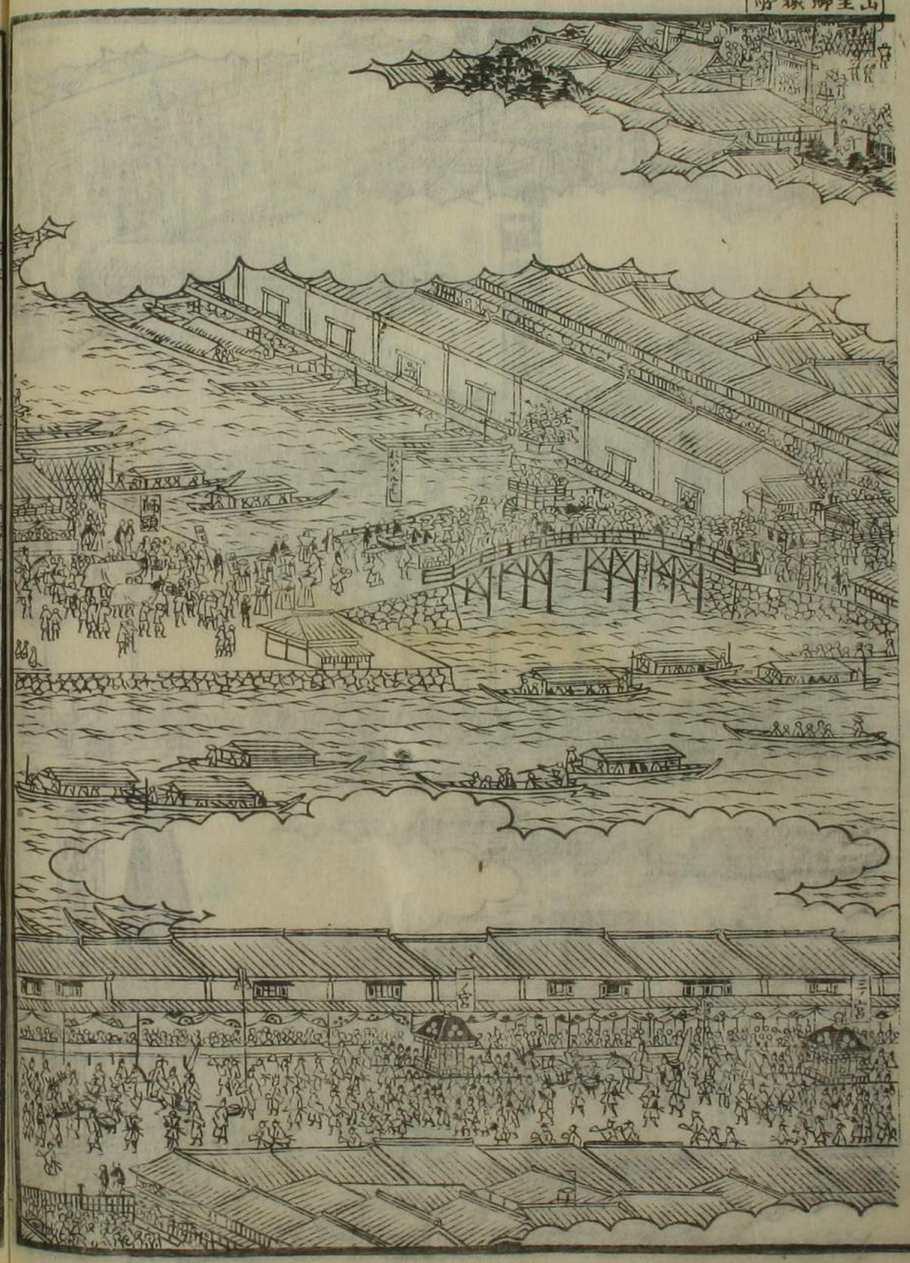


東本まつそ
天下まつりや
云車
其角


山王御祭禮
奉納山王御祭禮

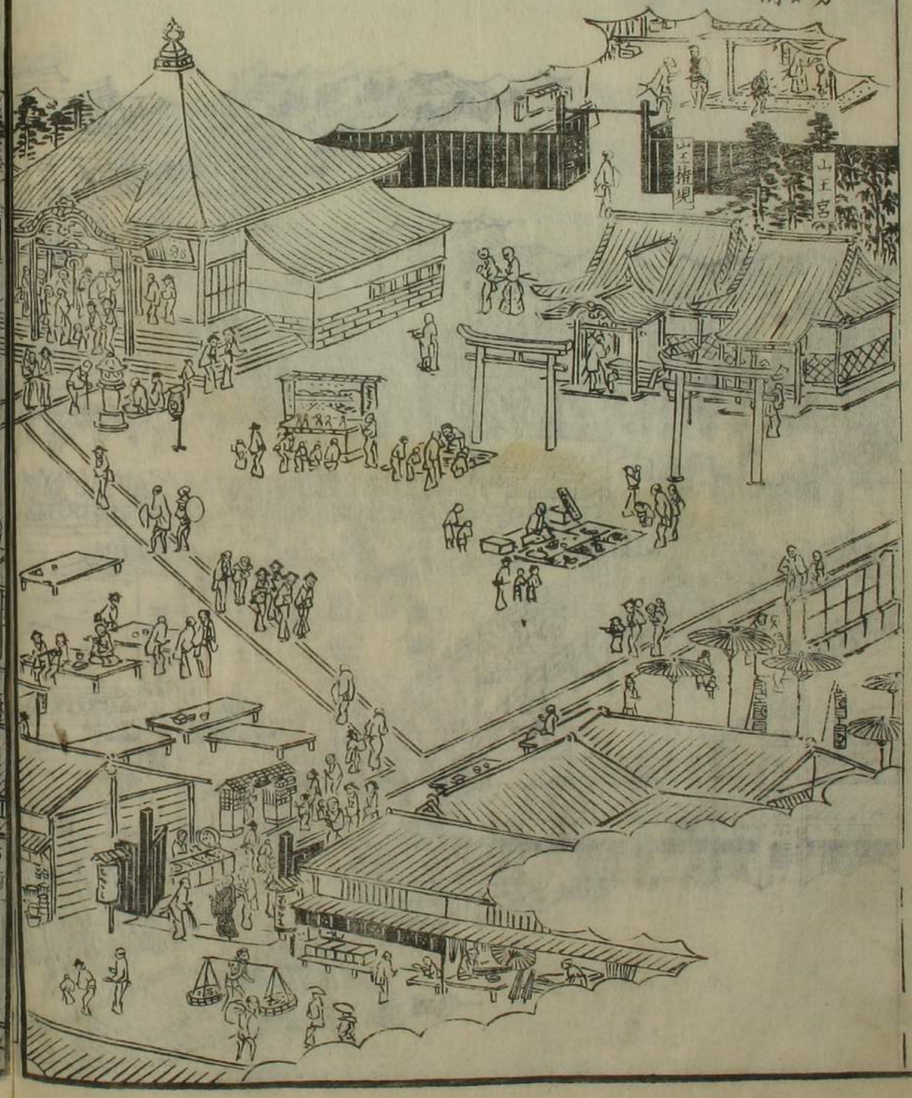

山王御祭禮
山王御祭禮


神輿御祭禮
神輿御祭禮
渡橋
坐王御祭禮



永田馬場 山王御旅所

六月十五日 御祭礼の時此所へ神輿行幸あり



茅場町 薬師堂

夕やくもそしき鳥の雲うち

毎月八日十二日
薬師の縁日あり
植木を商ふもの
軒しく並び
群集して
賑ふ

市立て別當ハ醫王山智泉院と号せ元ハ鐵島山と本尊縁起曰
恵心僧都ハ其父母大和國高尾寺の菜師佛ゟ禱り設くる
所の靈兒なり僧都佛門ゟ入く後法恩を謝せん為自ら此本
尊を彫刻あり高尾寺ゟ安置せしふ遙の後相州大場
村ゟ遷しまつりしを然ゟ慈眼大師東叡山ゟうつし此地や
大城の東ゟ位しもつも山王ゟ本地佛ゟまもらんとなり

天満宮　同境内ゟひり社司諸井氏奉祀せ二月八日ゟ廿五日を祭日とせり神像ハ画幅中くく寛永年間柿宮ゟ奉仕の春日局大樹ゟ拝受せしを山王の神主日吉右京進へ附与ありしを後諸井氏請得くふ勧請となり

類柑子　北の窓

我栖北隣ゟ芦荻蕃く生り笹阿なる地あり茅場町とふ
名ふ如くむかし茅ハ海邊なりしを今ハ家作しく
埋没ての葦原の体なりしを宝永の頃ゟ開墾ての
たくほのくふ移ふかなりしを中畧ふかくも泥めり
深ふなふ人くあつまれハ蓼の穂ゟ生のしまりて第ホ
ふつきにくる面影ふつけくもつて移ふかなりし
宮ふくくも玉のおもかげをうつしことをかし
りくす弗ゟ美るのふ這ふくく営をかくつもそくと
なし娘のはつをくるあるらくぬとをしくくんと
とすあやまちも多くさハりぬものよとてやりてゐと
めをそるるもの下畧

俳仙宝晋齋其角翁宿　茅場町薬師堂の辺也といふしかれど元禄の
往来先生居宅地　同所植木店なりと

伊雜大神宮

勧進相撲判職人尽
歌合の内衣と獅子舞

たてゑぶくろ
まきの
あらけふ
まふ獅子の
たてく
鼓ふ
もも
ぼきへ

逍遙院

昔雄誉霊巌和尚此地の海汀を築立て梵宮を営む故霊巌寺と号く霊巌島とよひ東海道名所記よまものゝ島も江戸の後世寺を深川へ移されて東の海中へ築出しゝ島なりと云云

隨見屋舗　同所新川一の橋の北詰塩町の辺其舊地ありとぃふ

茅場町へ渡る橋を霊岸橋と号けゝり

此所よ瀬戸物屋多く住せり　茶碗鉢店とも弐く或隨見長屋ともよべり

隨見ハ諸國の水土を考へ川村隨見ハ其土砂を以て川下よ新よ山を築き洪水の時高波を防除うむるをもて且沖よりの目當とす

最少くゝす

昔雄誉霊巌和尚此地の海汀を築立て梵宮を営む故霊巌寺と号く霊巌島とよひ東海道名所記よまものゝ島も江戸の後世寺を深川へ移されて東の海中へ築出しゝ島なりと云云

依て後世霊巌島と名起りし初ハ江戸の中

隨見自らの実名を安治と書ハ呼く安治川と云ことそ

世よ隨見山と称せり本名ハ波除山といふ

其餘の功

護八萱と同し字義あるを以称せしなりよりて此地よ住せられしゝ知るへし

伊雑太神宮　北八町堀松屋橋より一町そゝ艮の方塗師町代地町屋の間よあり　當社わ磯辺横町と呼へる字土俗磯辺太神宮といふ

伊雑の御神八天照皇太神宮の別宮ゆゑ祭神八伊佐波登美命と玉柱屋姫命二座なり寛永元年甲子伊勢長宮出口市正某伊雑宮より移しまゐらせ通三丁目よ宮社を営めり

今神明長屋と唱ふ八則是ゝ

同十年癸酉今の地へ移しまゐるとぃふも例祭ゑ六月廿六日よ修行ゑ

三ツ橋　一ツ所よ橋を三所架せしゆゑ名とす　町八丁目へ渡るを弾正橋と呼ひ材木町より白魚屋舗へ渡るを牛の草橋とぃふ又白魚屋敷より南八町堀へ架るを真福寺橋と号くなり

寛永の頃今の松屋町の角よ島田本弾正少弼やしきありしゆゑ

三ツ橋

風羅袖日記
ハテ埒もなく
業の
おろそかや
石ぶみの
石社
間
芭蕉

新川
酒問屋

新川
大神宮

伊勢太神宮 同所四日市町よりこの地の産土神とそ此所を俗に新川と唱ふ酒問屋多く繁昌の地なり 伊勢内外両皇太神宮を勧請しまつり遥拝所とも迂宮伊勢と同年なり 江戸鹿子よハ寛永 伊勢内宮の社僧慶光院比丘尼江戸参府の折柄旅亭の儀の為よ此地をもつとも御門跡並ひ比せられ紫衣を賜はりしく御末印地なり 始祖の比丘尼ハ内宮建立の時より連綿としく社僧つとめ依てく内宮の今し彼寺の住持比丘尼ハ代くこの家よう相続す 明暦の江戸炬図よ今呼謂三の浦丸の地よ伊勢上人の屋舗とあり 深川の大渡此あたりへ迂されしとそ

年山紀聞云

永禄元年日記不詳 後六月三日中山亜相神官伝奏 被談云去月廿三日神官宮外上棟無之 今沙汰に及ハず延引すべし 或比丘尼号二上人 先皇宸代初例 女房一号二 慶光院沙汰 未世の此くハ仮神忌有之 子細不詳 不相応くるの事 上棟取立者ハ内宮 又内宮上棟存立下云云 難二

永代橋 箱崎より深川佐賀町よ掛る元禄十一年戊寅始て是を架せらる 名とす長凡百十間餘あり 茶架よ名とす永代島よ架せ

諸國への廻船輻湊の要津くなり 此橋のかなたハ深川の大渡 東南ハ蒼海ゆくく房総の翠嶺斜よ関東芙蓉の白峯ハ大城の西よ峙ち乱波の連嶺ハ墨水よ臨おそ朦朧くも台嶺金龍の宝閣ハ緑樹の蔭よ見えかくれて自丹青を施もよ似て風光さらく画中よあるごとし

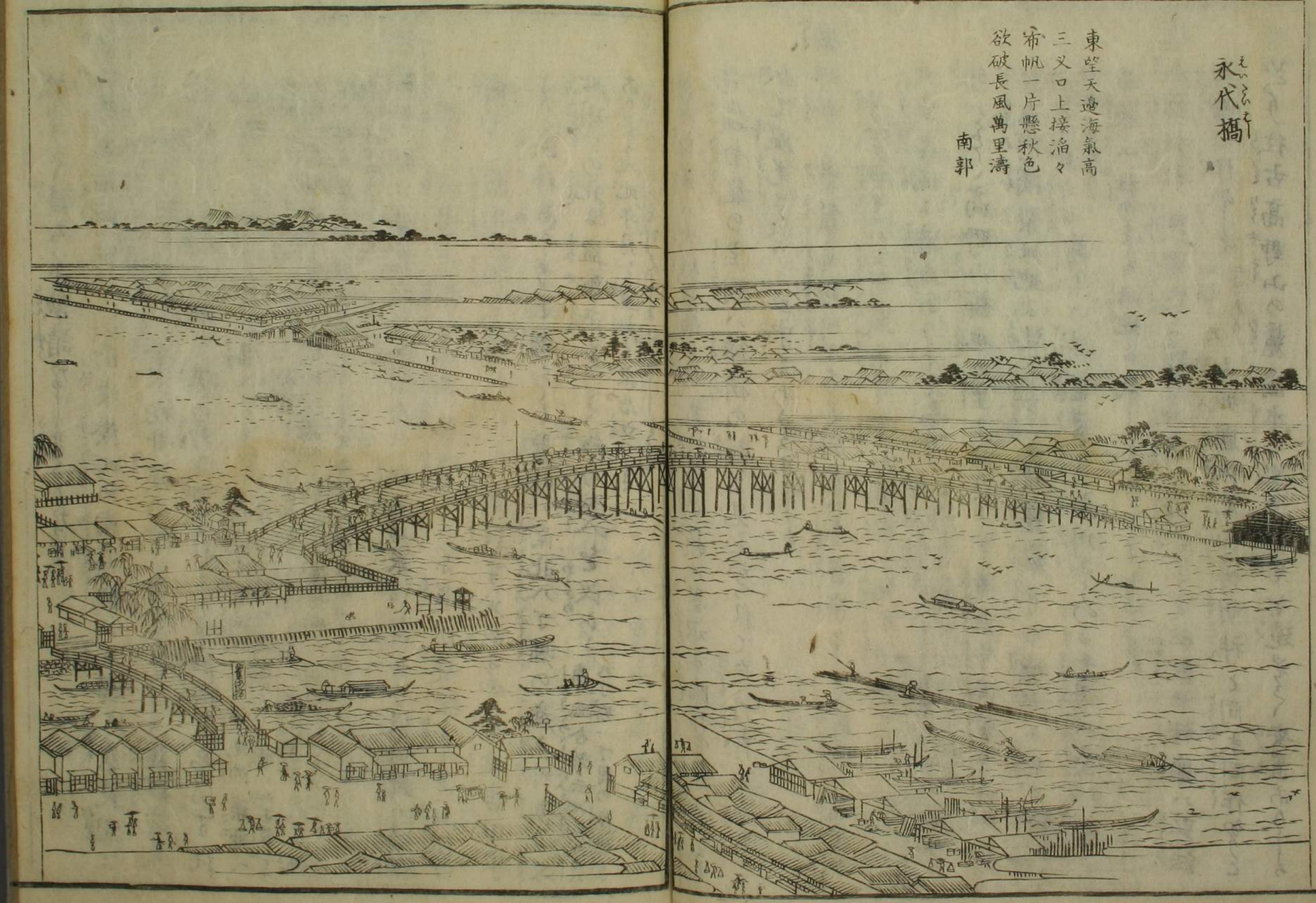
薬師堂 霊巌島銀町よあり 別當ハ真言宗ゆくく医王山圓覚寺と号す本尊ハ三州鳳来寺峯の薬師と同木同作ゆくそ大宝年間よ造立ありしとあり 座像 行丈三尺あり 鳳来寺薬師と称せり 又ハ橋水薬師とも称せり 此霊像ハとも高野山橋本の里よ 理趣仙人刻む所 此霊恵生阿闍梨此地よ迂しまつり 後霊巌寺の境内よ安置ありしとそ 慶長年間當寺の所基なりし 彼寺始萬治の後霊巌寺深川よ移る 乎頃此薬師堂と稲荷の社のみ此地よ残しまつり 此所の鎮守とそ社記云 神像ハ弘法大師の作ゆえ 山城國伏見稲荷明神と同木同作ありと 山丈一尺二寸あり

いとり往古高野山の麓橋本の里よ宮居を造ふく安置ありしろ

永代橋

東望天邊海氣高
三叉口上接滔々
帝帆一片懸秋色
欲破長風萬里濤

南郭



故ありて後こゝに勸請なりし
恵比須前稲荷祠　同所東湊町の南高橋の北詰人家社間に
あり　別當ハ天台宗にて昔ハ向井庄のやしきふありしより海賊橋より
普門院と号す
引移られし一項宮居を構の外よりうつされしとて此所をうひすし社
宮前又ハ蛭子前と唱へしとも　古老云く昔此地より鉄炮洲築地へ
湊稲荷社　高橋の南詰にあり　鎮座の来由詳ならず此地ハ廻船
入津の湊やにて諸國の商船普くこゝふ運ひ碇を下して此社の
出洲のさまあり此辺の洲よ芝海老とゝるもの多く集る依て漁人字よえひすの洲
と唱へ其洲崎よりこの蛭子神よ遷しゝ後世誤りて稲荷の宮ありしと
説もありかんし又夷子よ訛しいふく附會せしならんそこの
前ふく積所の品を悉く向屋へ運送す此故ふや近世吉田家
より湊神社の号を贈らる當社ハ南北八丁堀の産土神なり又
此川口の北よ監舩所ありて船の出入を改らる　事跡合考云此祠昔ハ
ありしを此地年月を重ねて家居立つゝきされハ八丁堀一丁目の南岸よ
向屋多く住せり

銭炮洲　南北八凡八町ありて大尚の町見を試しふなりとも或此出洲の形状其器よ似しる故の
号ありともいふ　白石先生の説よ此地ハ明暦火災後ふ築山住吉傍某を奉行
出洲と記せり　今ハ薪炭石材の問屋多く住せり

半井ト養翁居宅地　同所明石町の裏通りふあり
敷ハ文ト養の時賜りしと云云　電文江戸繪圖よ十間町の
西の裏通り寒さ橋の東詰の北の方川よ傍らる角よ記してあり
東都の醫官ふして牡丹花肖柏の裔孫なり連哥よひ
狂歌を能せしる此地を賜りしより一頃の口ずさみ

ト養ハ本道ととゝよ思ひしふ外科ふをも
按ふ江戸砂子ふト養の誤ともいふも哥意ハ他の人の詠るふ如く不審ふしる

了然禅尼菴室地　此地よ住しふしより紫の一本とゝるる草紙よ
禅尼の行實ハ第四巻落合泰雲寺の条下よ詳なり

佃島　鋲泡洲より傍らの孤島をいふ　舟松町より舟渡あり　文亀年間江戸の舊圖に向島とあり　天正年間

東照大神君遠州濵松の御城にまします頃　御廟所ありて住吉大神を勧請し奉る　多田の御廟所ありて住吉大神を勧請し奉る　なりとぞ　小佃村の漁父獵船をこぎ寄せて渡しまゐらせしが　御城ふまゐるを時の沙汰の膳の魚をなりわひとせしより　西國へ使ひなどの折ふしハかの漁船を以て仕へまつれり　旨　命ありしハ大坂両度の御陣にも軍吏の密使或ハ注進　魚獵等のその日く急なく仕へまつりしハ後漁人三十四人江戸へ召されし慶長年間浅草川沙汰遊獵の時佃を引せらるゝ同十八年八月十日海川漁獵をつかさどる旨免許なりしより　其頃迄ハ安藤石川両侯の藩邸ありし　旨　台命よりの毎年十一月より三月迄息らすまる其間ハ他の獵を堅く禁ぜらるゝ　空地三千坪をあたへらるゝ佃町と号けらるゝ　沙菜魚をもつかさどる　或人の説ハ此所ハ始安藤右京進ぬしの地ゆゑく住吉の社頭ハ繁茂せるの藤ハ安藤家ゆゑく栽るゝ木ありしいつの頃よりか廃宿して居らずとありしが然ル寛永年間貢ハ佃島ハ紀州賀多の漁人雑居し　一島皆本願寺宗ゆゑく他宗なしと云ふ　此地ハ殊更白魚よく名あり故よ冬月の間毎夜漁舟ハ篝火を焼四手網を以く是を漁ふ都下坪るゝく是を賞せり春よ至る二月の末より八川上よ登る弥生の頃子を産其子秋よ至る七八月の頃江海よ入と云事監合考よ云両國の川筋よ産ずと白魚ハ尾州名古屋の浦よりとよせゆゑ

住吉明神社　佃島よあり祭る神ハ摂州の住吉の御神よ同一神主ハ平岡氏奉祀也　元保年間摂州佃の漁民よ初く此地を賜りしよりこゝふ移り住本國の産土神なるゆゑ分社しく

名月や
住吉の
まつたく
浮雲

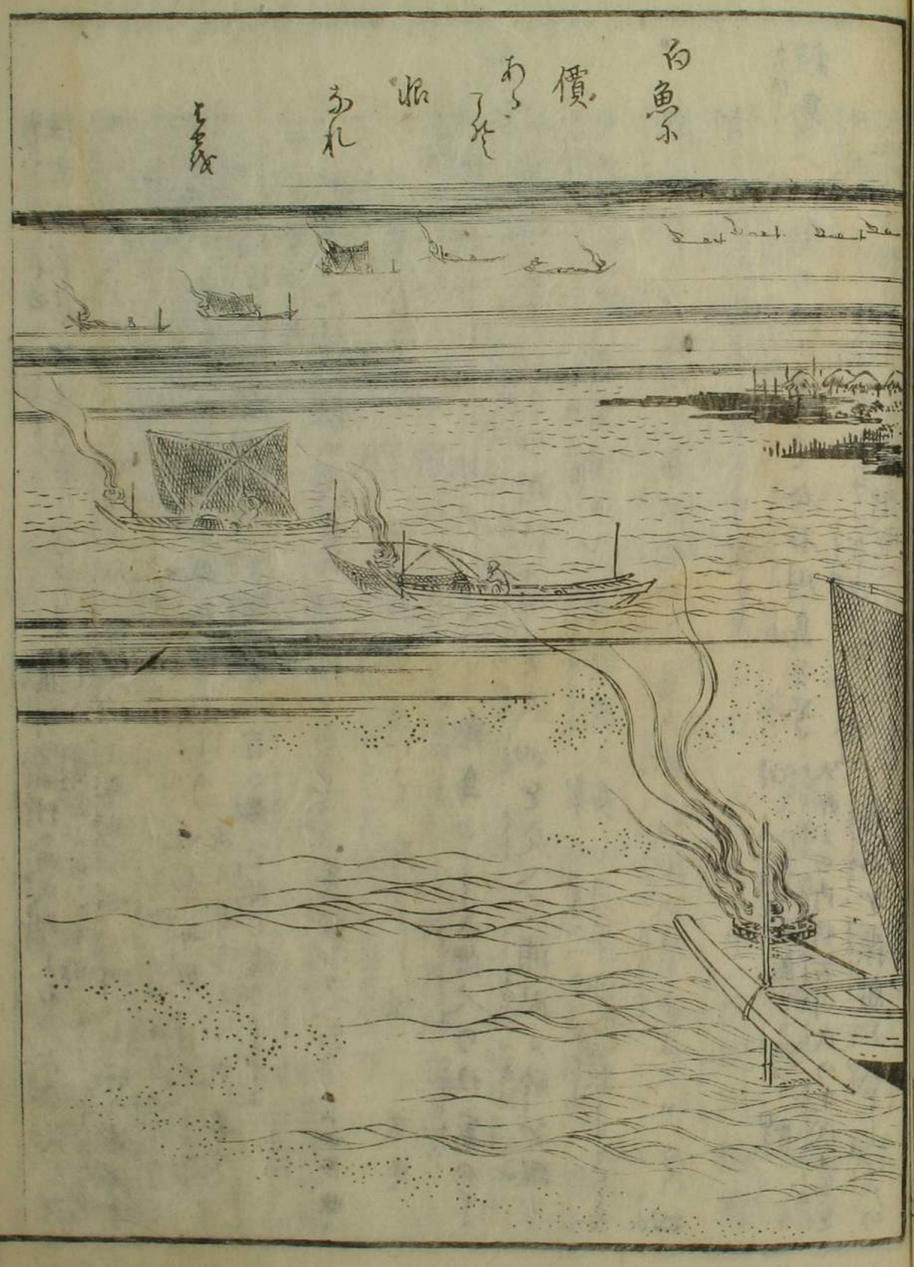
上総
安房
佃島

其二

湊稲荷社

佃島
白魚網

白魚
價



住吉の宮居を建立せしとなり　摂州の佃村八西成郡にあり古今集に
住吉明神の宮居ありく島とのめる是なりしかし
うけのひしより降佃村の地より船の纜綱を
此の分社　纜社八毎歳六月晦日名越祓修行あり　例祭八毎歳六月廿八日北九日
逍遥院実隆公住吉を納和奇十首の題を詠てまいり人く群集す
江上月

此浦の入江もわかぬ澄月のみるめをかりく栄秋こそも　戸田茂睡

名月やこゝ住吉はよけれども

此地八都下を去る咫尺なるとゝも離島おゝく漁人の住家のこ
所得頼なり　弥生の潮乾あて貴賤袖を交へて浦風よ酔を醒し
貝拾ひあるき磯菜摘るゝと其興殊よ多し　月平沙を照しくそ
漁火白く芦辺の水雞波間の千鳥も共よ此地の景色よ入りく四
時の風光足をとゞめてまよなし

鎧島　佃島の北よ並へる今石川島と号

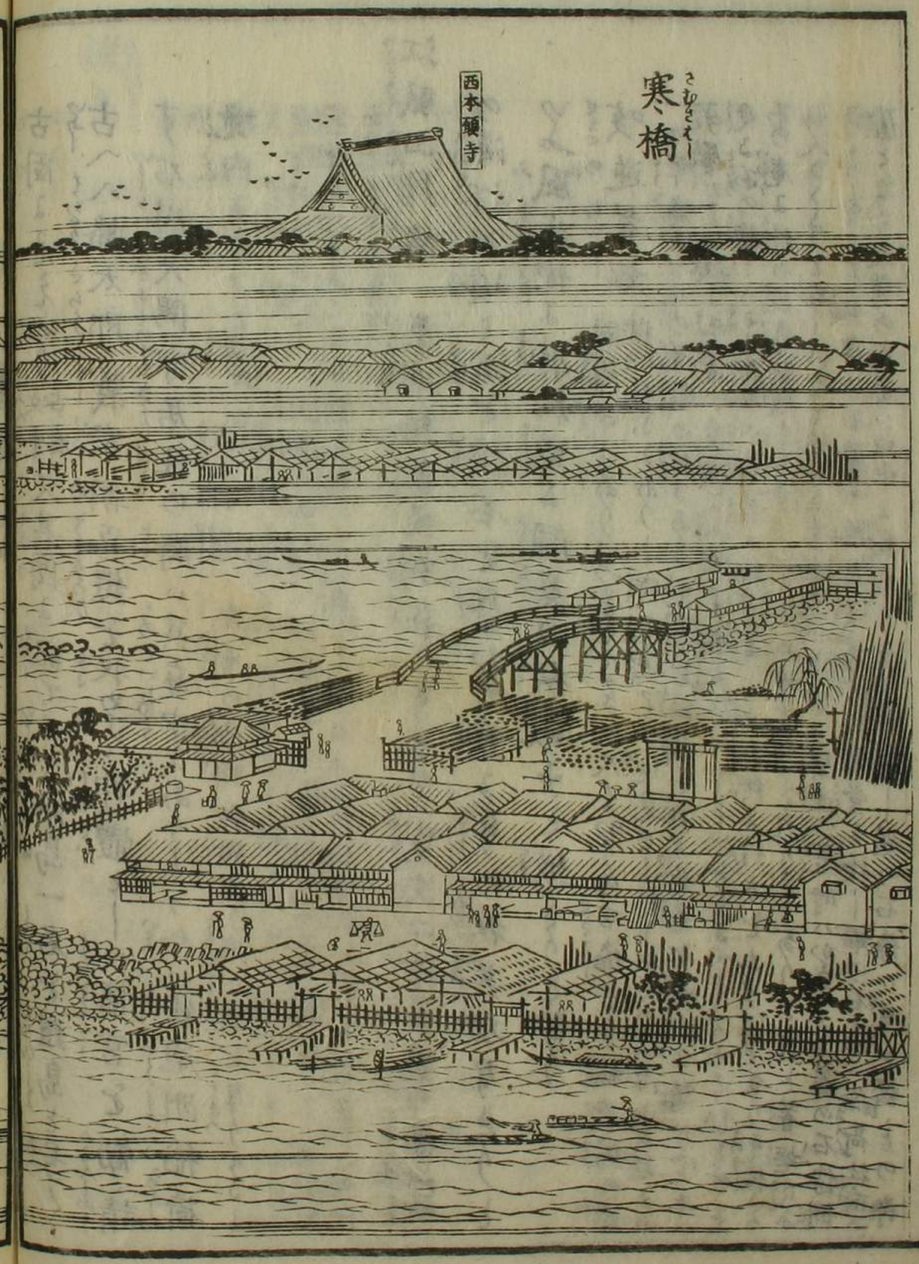
古図よりそう　文竜古図　又其図よ記て云く此島一名を鎧島と号く
古へ八幡太郎義家朝臣鎧を収めく神体とし八幡宮を勧請
す石川大隅守居住の時ハ其庭中よありしを今ハ鋲炮洲稲荷
境内よありと云云　或人云昔　献廟の浄時異国より鎧一領をまいりるよ
是を片ぬよ持く　重くして是を持りのありとし時石川氏の祖大カありしハ
宅地よなまをなり　大樹の御前へ披露なし浄感賞のありて此地を
鎧を携へし賞とし　くのち此地されハく鎧島とハ号け

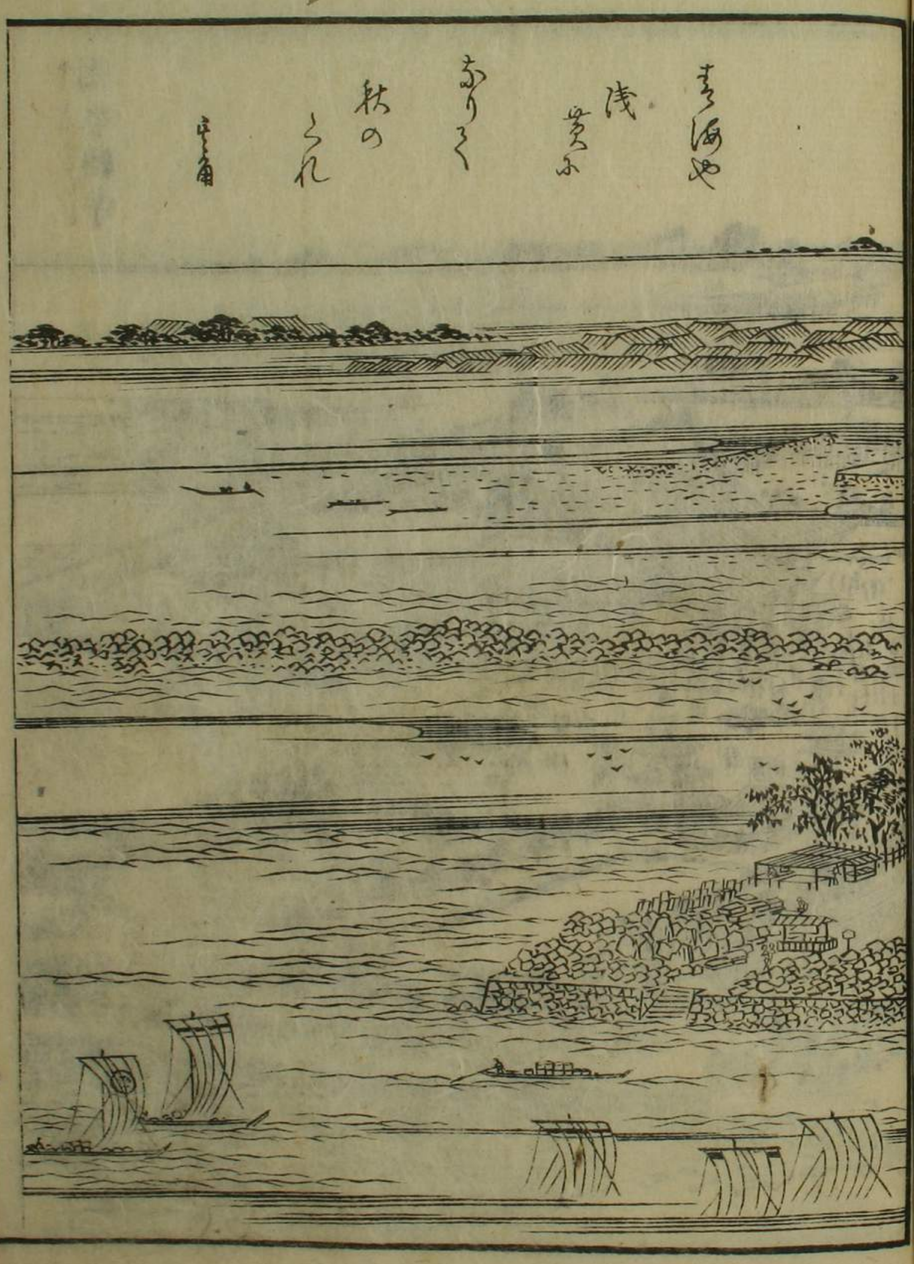
江風山月楼　築地稲葉侯別荘の号なり　寛文二年壬寅の春此所
の海汀を塡て土を積石を畳むそ翌る年の秋其功なりとい
ふ風光他よ勝れ殊よ洞庭の秋影ゆを越うとなり

咳逆者嫗　同藩中よありしいつもあ
咳逆の草庵よ一人の老僧の住るあり　小田原よ
一の嫗よ故よ千度一度城よ入来りて
受るなの庵よ件の石像を残しておりしを
仏人のゝをもとゝ依者の石像ハ口中よ病あるとの
置となり又者の石像ハ咳逆の神

寒橋（さむさばし）

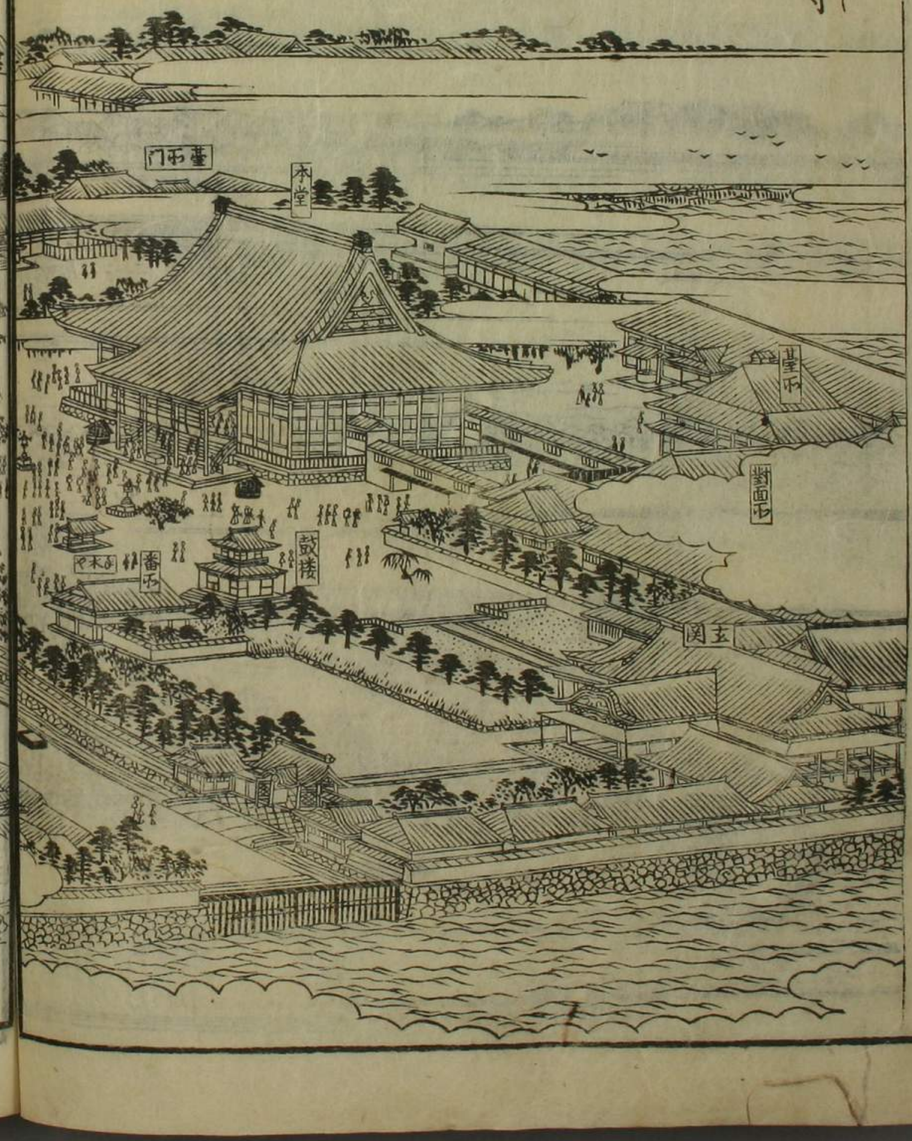
西本願寺

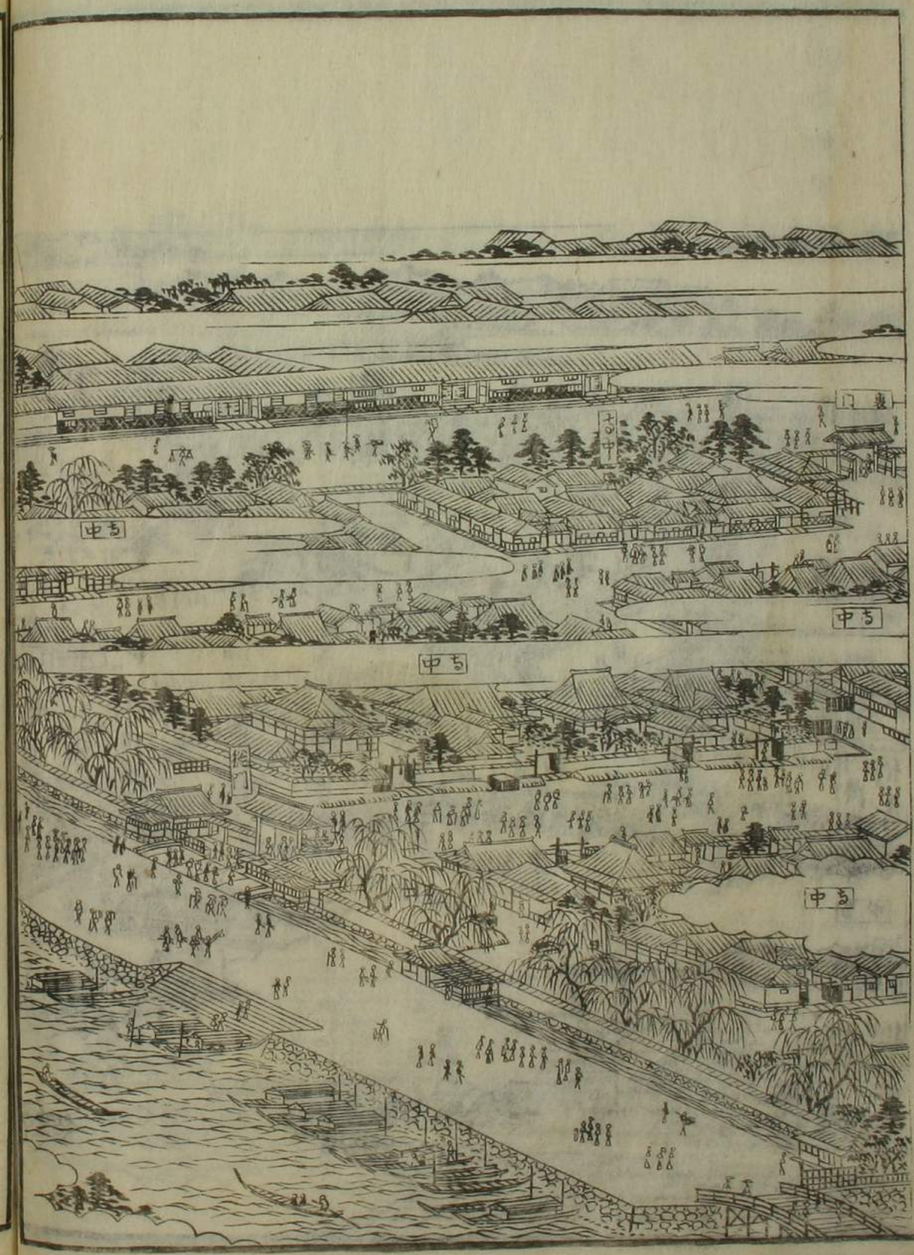




まつ海や
浅
ふりく
秋の
くれ

西本願寺

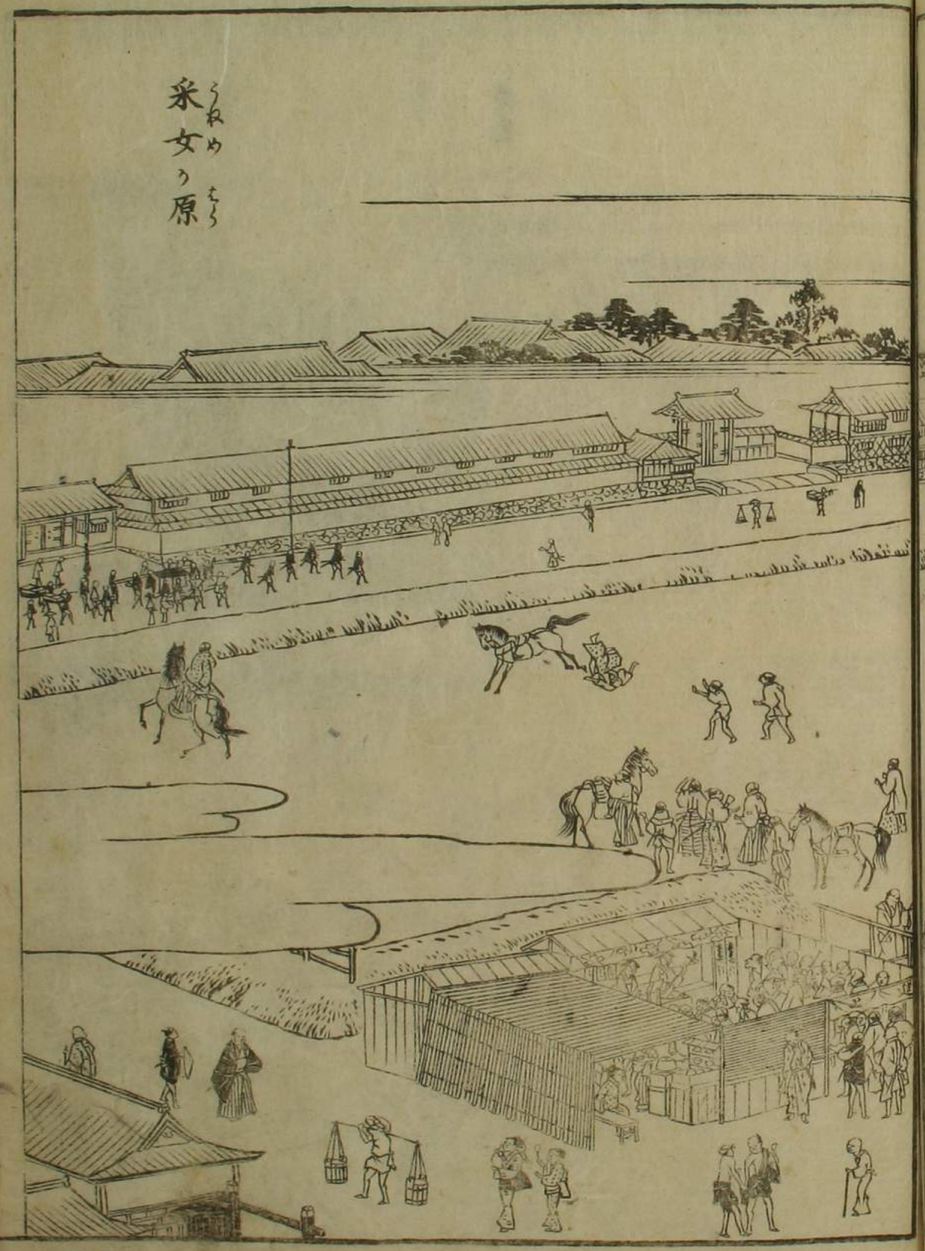


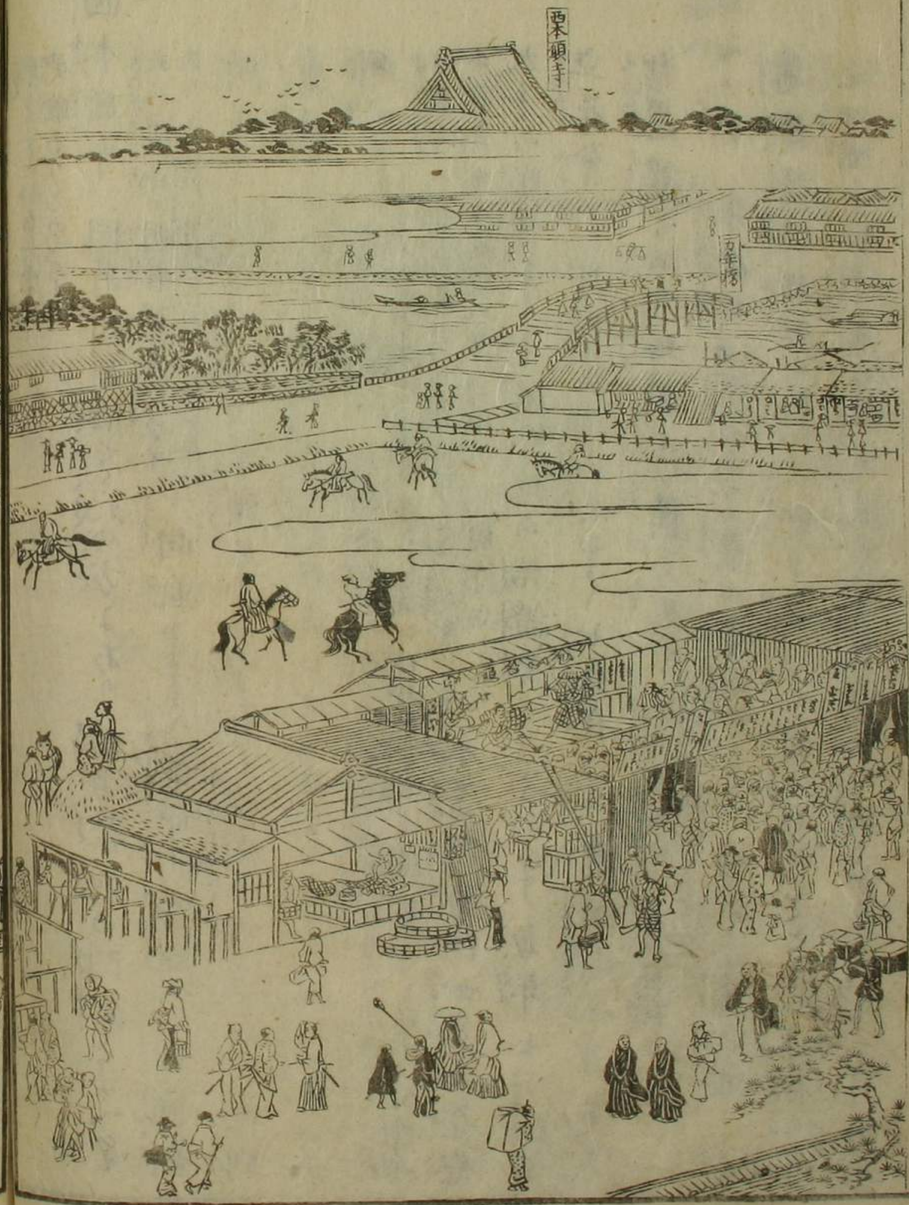


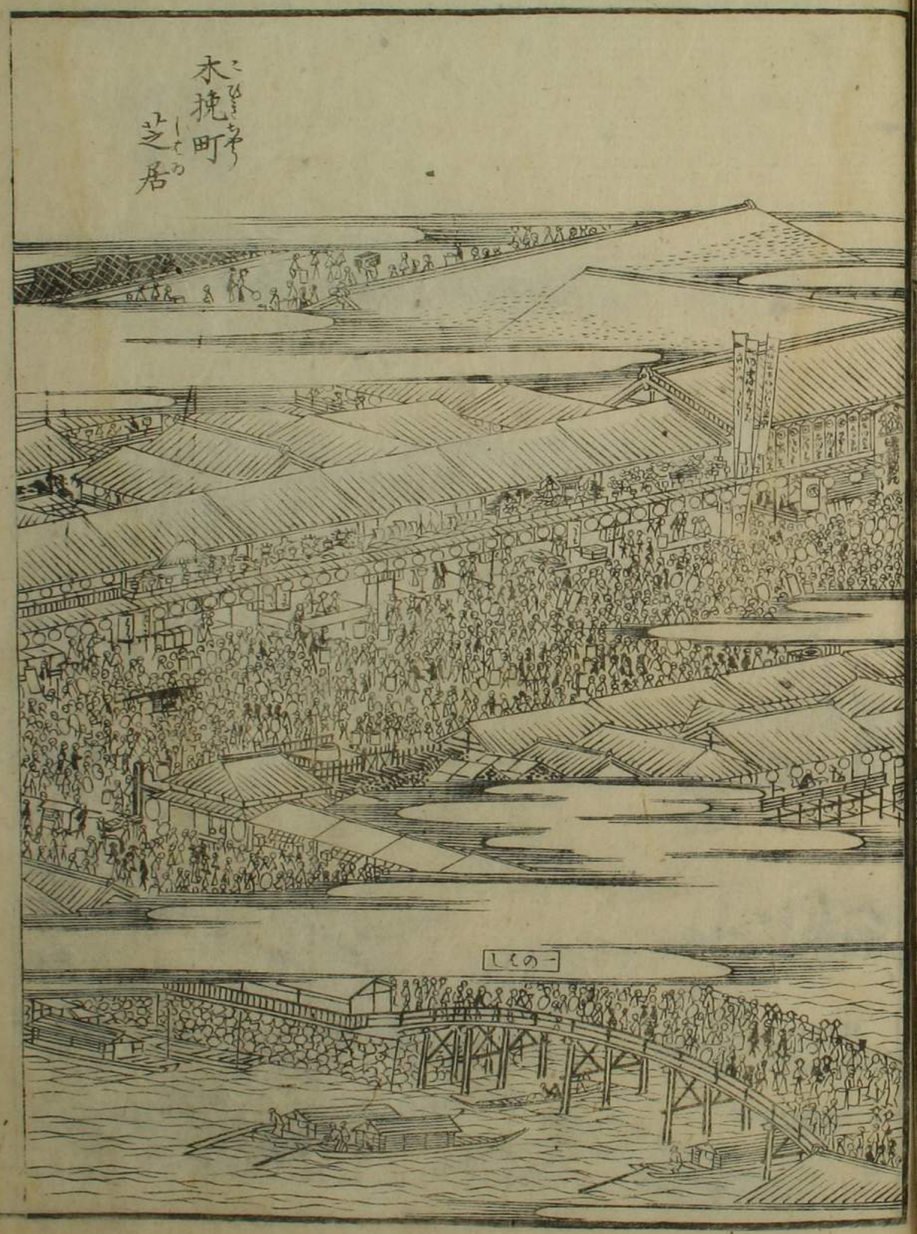
觀音堂　梁嶮ありとぞ

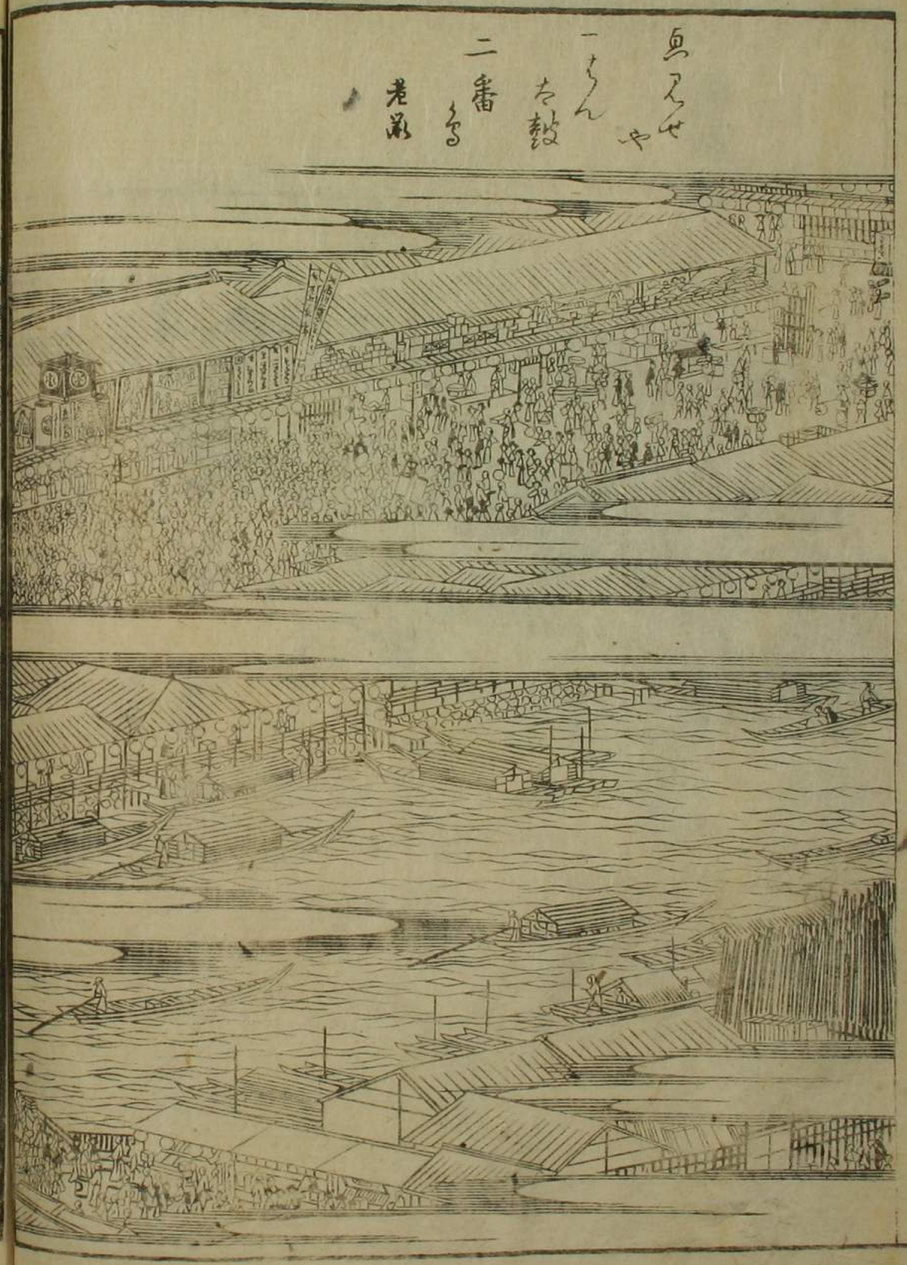
西本願寺　同所川を隔て北の方よあり俗よ築地の門跡とぞ
或人云此地ハ明暦四年ゟ仰のゟ一向
ありく樂所なりとぞ　京都西六條ゟ輪番
所なり　宗祖の尊影を　塔頭五十七宇ある　始横山町二丁目の南側
裏通りふひのもとを明暦大火の後此地よ移さる　准如上人を當寺の
開祖とぞ　宗流を汲華を飾らる　江戸名所記よ　神祖御在世の
本願寺の建立を云々　公へ　白石先生云く　善養寺ゟ一向僧東
和漢年契ゟ延宝八年庚申西本願寺の末寺を立られ
太子の彫像　泉州堺の信證院ゟ
立花會十一月廿八日開山忌ゟ七昼夜の法會修行あり是ぞ
報恩講と云又俗用ゟ講と
采女ヶ原　水挽町四丁目ゟ東の方此あよ馬場あり常よ賑しく
講釋師浄瑠理の輩八軒を並つらく狂人の足をとゞむ享保九年
迄此地よ松平采女正定基のやしきありし故ぞ同年正月晦日

采女ヶ原



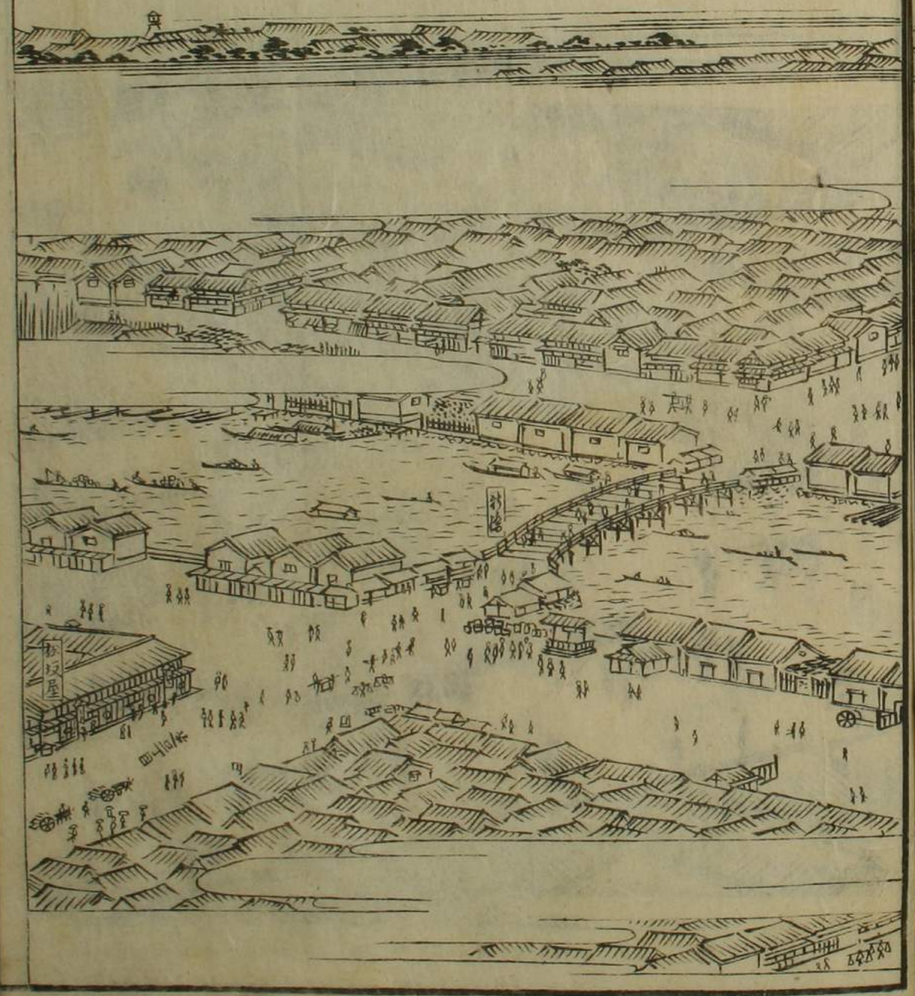


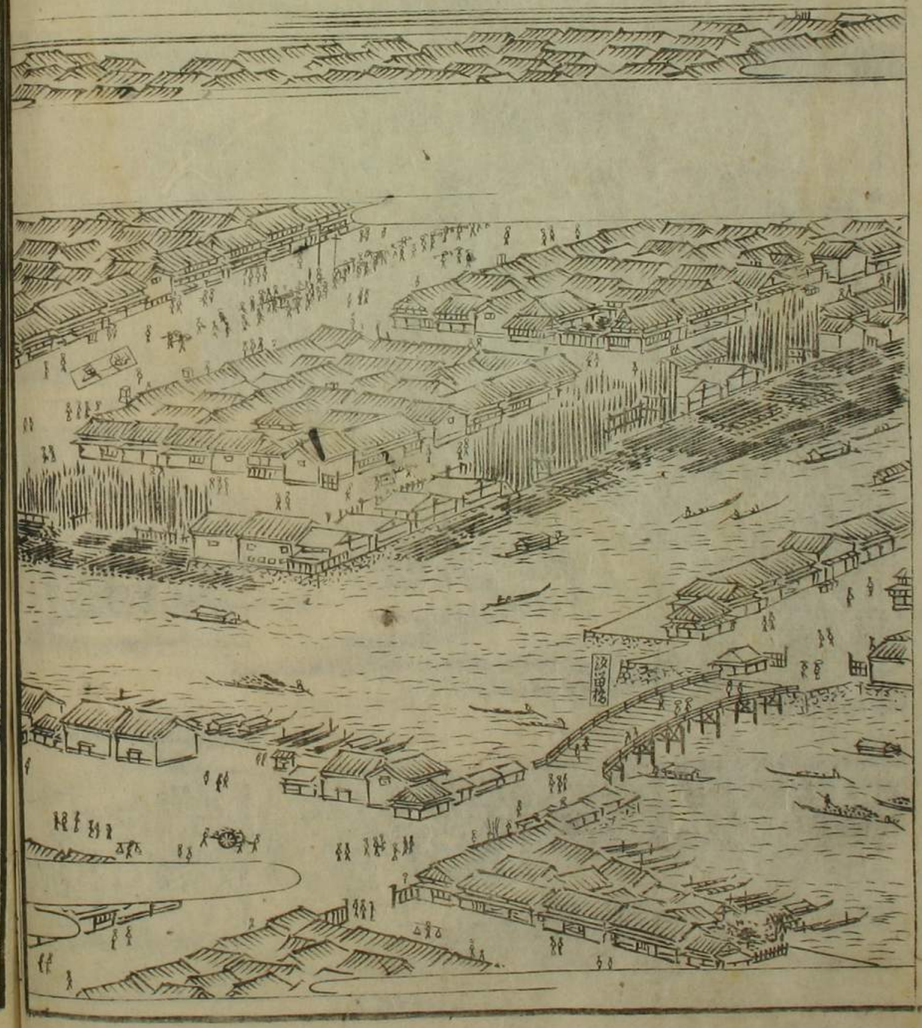




新橋
しんばし

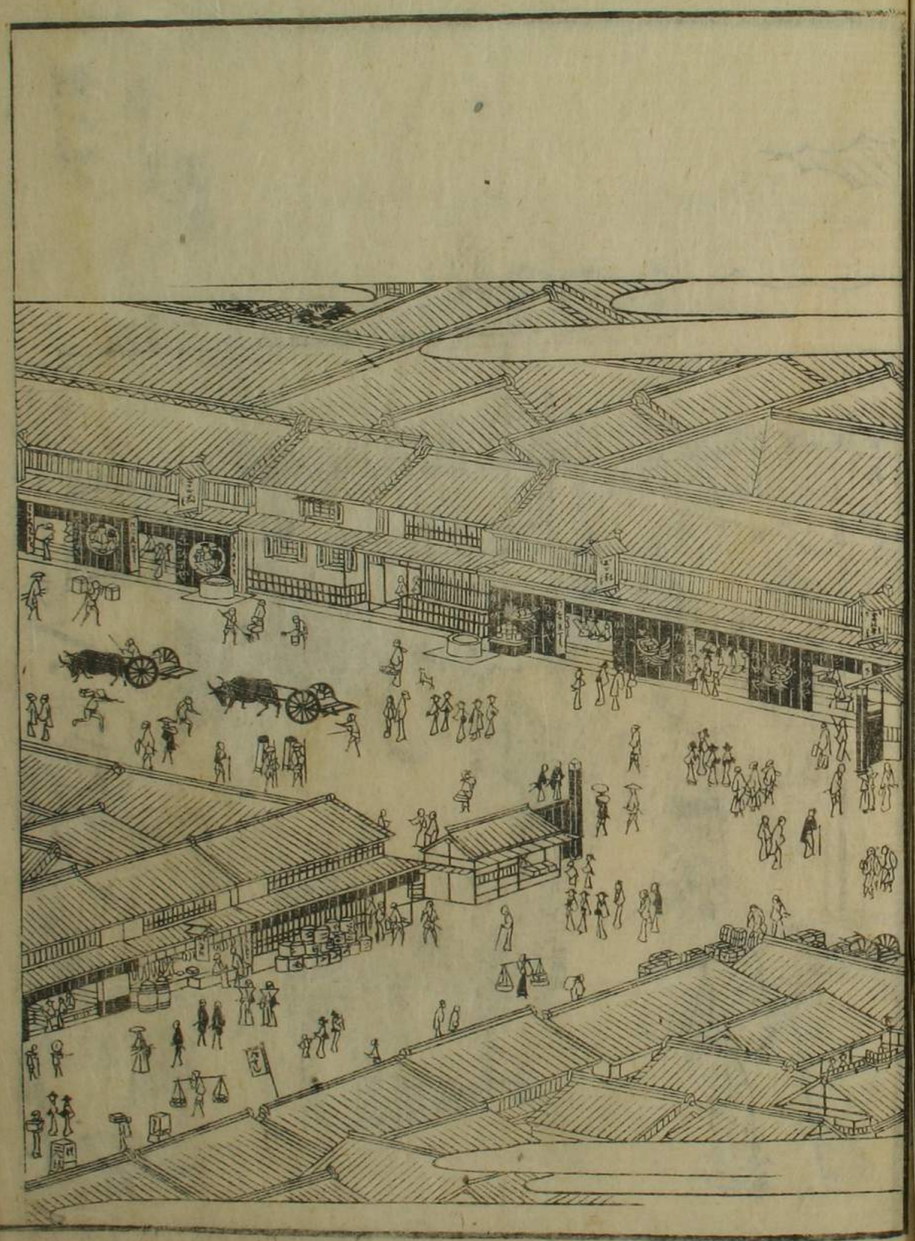
汐留橋
しおどめばし





をはりちやう
尾張町

布袋屋
亀屋
恵比須屋
呉服店



きんろくちょう
金六町
ちゃぶく
茶ぶく店

火災の後やしきハ麹町三丁目の裏へうつされ同十二年の頃より跡へ新ら馬場を開くやうとなり此所の井を采女の井とよぶも彼やしきの用水ありかゝる名つくなり

哥舞妓芝居　木挽町五丁目よりあり今森田勘弥の哥舞妓芝居綿〻と相續す

哥舞妓芝居の基原ハ堺町葺屋町ハ此所六丁目より山村長太夫とのゝしり名代の狂言座ありく中村市村森田等の芝居をおハせく

芝居の事ハ正保元年申歳より始まるそ東海道名所記よ木挽町より詳なり

此時より至りて斯絶せしより此芝居を止められ山村長太夫座を相續す

是なり後よ名を改て山村長太夫とのゝしるなり是も女子のくありしかハ養て子とす二代岡村五郎左衛門是なり後よ名を改て山村長太夫とのゝしるなり是も女子のくありしかハ養て子とす二代岡村初めハ岡村長右衛門と云実子なく使子七十郎とのゝしるなり是も女子のくありしかハ養て子とす二代岡村

哥舞妓芝居の条下よ詳なり

此芝居ハ正保元年申歳より始まるそ東海道名所記よ木挽町より詳なり

此時より至りて斯絶せしより此芝居を止められ山村長太夫座を相續す

是なり後よ名を改て山村長太夫

江戸名所圖會　天樞之上